

338-65



希臘

勇士物語



1073

はしがき

此の書「希臘勇士物語」は、十九世紀英文壇の大家チャールズキングスレーの名著グロクヒーローズを本にして同じ事實を日本語で書た者である。著者は是れを何うしても譯書といふ勇氣はないのである。开れば此の書の原本として使つた者は、立派な文章と威嚴ある事實とで世界文壇といふ大きな廣い立場から見ても嚴として犯し難い地位を占めた作物であるのに、我が此の「希臘勇士物語」は文章が蕪雜で、大體字句は原書の者を借用し乍ら、而かも其の一字一句を忽がせにせず寫し取つた者でなく、都合の悪い部分や面倒臭い處は、原著者には甚だ申し譯ない次第だが、放に剪み切つて了つた。开して、恚う書き換へられた者を見ると文章も見ると堪えないほど拙劣で、其の爲めに原書では、巻を措くに忍びない程、面白かつた事實が、此の書では、比較的興の湧かない者となつて了つた。玉を化して瓦とするといふが、著者の原著者に對するや、更に其れ以上の罪を犯して居るのである。

世界文壇で、強い光輝を放つて居る原著が憊うまで悪化されて了つたのは、著者の
 忍びない所ではあるが、元來本書は文藝上の價値を問はんが爲めといふやうな動機
 下に成つた者ではないので、實は著者には最う數年の昔となるが英語學習の折、余暇
 によりより書き寫して置いたノートを此の度整理して、憊う一冊の書に纏めて見たの
 である。而して今、這麼幼いすさびを公にすることを敢てしたのは、此れから一步一
 歩と精進向上し行くべき著者の遠い前程に對して是れを既に辿り來つた既程の上に印
 した確實な一個の足跡として見たいといふ小さい慾望に過ぎないのである。

希臘神話入門の書として無上の書、文体は全く聖書から得た散文として最も美しい
 者、色彩音調文章の音樂的抑揚、すべて近英の散文に類ひなきものと迄いはれた本書
 は、本の面影を辿るに由なきまでになつて了つた。若しせめて本書が爲しうべき功過
 といふやうな者に就て我れに一つでも望があるとするれば、其れは本書が希臘神話入門
 の一助ともならばといふ只夫れ丈けである。(明治四十四年極月登代美識)

しきり 勇士物語目次

上の卷 バアセアスの卷

- (その一) すて小舟……………一〇
- (その二) かしま立……………一〇
- (その三) ゴルモン退治……………三四
- (その四) 凱旋の旅……………五四
- (その五) 故郷の錦……………八〇

中の卷 アルゴナウツの卷

- (その一) 山上の健兒……………八九
- (その二) 無情の伯父……………一〇五

(その三) 金羊毛狩……………二二五
(その四) 魔女メデア……………一三二
(その五) 海上の妖術……………一六九
(その六) 勇士の末路……………二一九

下の巻 セシユウスの巻

(その一) 石下の寶……………二二二
(その二) 妖魔の害……………二三二
(その三) 螺堂の化生……………二八一

目次終

欠

MISSING

箱の中では、孩兒が母親の胸に懷かれたまゝすやすやと眠つて居るが、哀れな母親は眠りもえうしないで、唯四方を見廻しては泣き悲んでゐるばかり。その間にも孩兒には歌を謡つて聞かせてゐた。

母子は到頭、とある海角を過ぎて、水色の濃青い渺茫とした沖に出た。其處は見渡す限り何處までも廣い海で、波か空か風かの外には何一物、目に見える者とてもなく、耳に聞える者もなかつた。丁度其の時は海は和いで居て、空は晴れ晴れしり、そよそよと吹く風は冷やかに、いかにも平穩な夏の海景色であつた。

その内に夜は明けて來た。が、其の明けの日も其の儘暮れて了つた。ダナイの身になるも晝の長いこと、それは一堪えられないほどであつた。憊うして其の晩も、其の次の日も暮れて了つた。ダナイも終に饑餓や悲嘆のために呼吸さへ苦しくなつて來た。けれど、それでも、矢張四邊に鳥影一つも見えて來ない。孩兒は終始すや／＼とばかり眠つて居るので、ダナイの心細さは亦一通りでなく、到頭、哀れにもダナイは

孩兒の頬に自分の頬を覆ひ重ねて眠り入つて了つた。

不圖、ダナイの眠は醒めた。と、自分の乗つて居る木箱はころ／＼と鳴つて居るし、それに空中にも、一杯に何者かの響が聞えてゐる。仰ぎ見ると、頭の上には没日を浴びて眞紅に染まつた高い断崖が聳え立ち、周囲には水余濤が白く立つて居る。

ダナイは聲高く救助を呼んだ。すると、折よくも、断崖の上に一人の身長高い物腰の卑しからぬ人が一人立つて居て、ダナイの入つた木箱の流れに漂ふて居るのを下瞰して居た。身には地の粗い羅紗の上衣を着て、頭には顔の隠れる程鏝廣い帽子を目深かに被り、手には三叉の漁戟を持ち、投網を肩に擔つて居る。身の長や歩み振り、又は流るゝやうな房房した金髪や濃い鬚髭の様子、或は後に隨いて居る魚籠持つた二人の従者から考へても余り身分の賤しい者とは見えなかつた。けれど、ダナイは其の人の容態をまだ、能く見窺めもしないうちに、其の人は手に持つた魚戟を投げ棄て、岩の上から身を躍らして下に飛び降り、投網を木箱に投げかけた。投網は誤たず木箱に

覆ひかぶさつて、ダナイも孩兒も無事に岩に手繰り寄せられた。

男はダナイの手を執つて木箱の中から引き揚げた。

「あゝ、貴女は奇麗な御婦人だ。何うして亦這麼脆い木箱に乗つて、此處まで流れてお出でになつたのでせう。お見かけ申す所、屹度貴女は何國かの王様の息女御に違ひない。此の息子様の人相にも何處か普通の人間の兒とは思はれぬ所がある。朝々に昇る太陽のやうに光り輝やかしい孩兒の顔を指し乍ら、其の男は恚う曰ふのであつた。

が、ダナイは唯頭を垂れて許りゐて、一言の口もきかず、潜然とばかり泣き出した。

「妾は不幸福者で！。まあ妾は今何といふ國に流れ着いたのでござりませう。此處には什麼な人々が住つて居るのでござりまするか。」

とまくと、其の男は、

「此處はセラインオスといふ島で、かういふ私は希臘人で、此の島の王ポリデクテスは私の兄弟ぢや。私は漁獵が好きなものだから世間では私のことを投網のデクテスといつて居る。」

恚うきくと、ダナイは身を俯伏して、雙膝を抱いて叫んだ。

「あゝ、貴卿さま、妾は不仕合な運にあつて、這廢島に逐ひ流された外の國の婦人です。可哀そうと思召して、妾を貴卿さまのお家に召し使つては下されますまいか。妾は元來さう身分の卑しい者ではなく、さる國の王の息女で、此の子は貴卿さまの仰しやる通り普通の人間の子供ではありませぬ。妾は機織と刺繡の道にかけては妾の故郷の國內で一番上手と賞められて来た者で、これでは什麼な處女にも劣らない積りで、お家に置いて頂いても、たゞ、何もせず遊んでばかり居て御厄介はかけませぬ。」

といつて、未だ何事か先きを續けて曰はうとしたが、デクテスは其の言葉を遮り、

ダナイを抱き上げて、

「あゝ、余り心配はせぬがよい。私は年を老つて了ひ、私の後嗣も最う白髮交りの老人となつて居る。それに他に子供がなくて寂しい。何卒、貴女は私の家に来て、私共夫婦の子供になつて下されな。貴女の息子は私共の孫としたらよからう。私は神信仰の心深く、外の國の人を見ると親切にしてやるのが好きだ。私は善い行爲をして、悪い行爲をしても屹度それが自分の身に報うて來るといふことを知つて居るから。」

恚う親切にいはれて見ると、ダナイの心は落着いて來て、嬉しくてたまらない。慈悲深いデクテスのいふ儘に其の家に行つて十五年の長い星霜を其の家で過したのである。

(その貳) かしま立

長い長いと思ふ十五年の星霜さへも過ぎて見ると、一夜の夢も同じである。當年、幼なかつた孩兒も今は背丈の延び延びした立派な青年になり、商業貿易のため諸島の間を往反するやうになつた。ダナイは、其の子の名をバアセアスとつけた。セライフオス島の人民は皆バアセアスのことを人間の子とはいはないで、大神チウスの息子だと曰つてゐた。年は僅か十五歳であつたけれど、其の身の丈は島内での一番背の高い人と比べても頭部だけは高い。競走、相撲、闘拳、投環、投槍、操舟又は彈琴、其の他人間の爲すことで、何一つ他人に勝れて居ない者はなかつた。加之、勇氣があり、誠心が厚く、柔和な禮儀正しい青年であつた。これは慈悲深いヂクチスの訓練方のよかつた結果であつて、バアセアスが其の教訓をよく守つたといふ事も後には、それが身の利益となつたのである。それは、十五年の星霜を経た現今、ダナイとバアセアス

との身の上で大變に危いことが起つて来て、バアセアスは母親と自分との身を保護する爲めにいろ／＼の計謀を廻らさなければならぬことになつた。

ヂクチスの兄弟で、此の島の王ポリデクテスはヂクチスのやうな心情の正しい人ではなくて、慾深い悪智慧の多い残忍な男であつた。ダナイの奇麗な容貌を見るにつけて、自分の王妃にしたいと思ふやうになつて来た。けれど、ダナイはポリデクテス王を嫌つて其の心に従はない。ダナイは、到底最う再び死んだ夫には會へる身ではないと知り乍らも、矢張其の夫の事や、夫れに随けても忘れ遺念の子供のことばかり心にかゝつて居た。それで、ポリデクテスは大變に怒つて、バアセアスが船に乗つて他處の島に行つて居る留守の間にヂクチスからダナイの身を奪ひ掠つていふには、

「若し貴女がいふことを聞いて私の妻とならないときは貴女を奴隷にして丁ふ。」

それでもダナイは此の残忍な王様の妻になることをいやがつた。それで終に、奴隷にされて、水を掬んだり粉磨臼を廻したり打撃れたり、重い鎖で繋がれたり、いろいろ

ろの苦しいめに合はされて居た。けれどバアセアスは海を越えて遠いサモスといふ島に居たから母親が這麼酷いめに遭つて居ることは露も知らないで居た。それが或る日のこと、サモス島では、船に荷物の積み込みをして居た。が、バアセアスは暫時暑い太陽を避けて森の中に逍遙ひ行き其處の芝草の上に坐つて休息ふて居た。が何時とはなしにうとく寝入つて了つた。其の時、彼れは不思議な、是れまで曾て見たことのない夢を見たのである。

其の夢といふのは憊うである。バアセアスよりも、又、什麼人でも及ばない位、脊丈の高い、そして灰白色の濁りない物の底をも見徹すやうな、それでゐて、亦不思議に柔和な優しい眼付の奇麗な女が森を通つて自分の側にやつて來た。見ると頭には甲を被り手には槍を持つて居て、長い青色の上衣をかけた肩には鏡のやうな磨けた青銅の巨楯の着いて居る野羊の皮をかけて居た。女は立ち停まつて其の澄み切つた灰白色の雙眼でバアセアスを見たが、バアセアスは其の時、その女の雙眼は兩方とも眼瞼も

瞳子も動かないといふ事に氣が着いた。が、女の方は眞正面からバアセアスを睨めつけて、心の底の底まで窺き込み、恰かも心の中に潜んで居る秘密を残らず見抜き、更に、バアセアスが生れて考へた事や希望した事を悉く底の底まで知り抜いて了つたといふやうである。

女は

『バアセアスよ、妾は御身に一つ使を頼みたいのだが。』

と、いつた時には、バアセアスは雙眼を下に逸らして黙頭いたまふ、心は戦々として來て、雙頬の色も火の燃えるやうにほてつて來た。

『貴女、貴女様は何うした方でござりますか。どうして又私の名を御存じなので御座りませう。』

『妾はバラス、アスイネといふ者で、人の心の裡の事は残らず知つて居る。又男らしい人間と下卑た人間との區別もよく分つて居る。妾は元來、女々しい土性の人間を

好まない。が、土性の人間は幸福であるけれど、それは妾が幸福にしてやつたのではない。彼等は牧場の羊のやうに安らかで、肥えて居る。自分の手では種を播きませず、又植を付けもしない者を食つて居る。丁度厩の中の牛のやうだ。又地面を這つた瓢箪の蔓のやうに成長して行くが又、瓢箪の蔓と同じやうに旅客に日蔭を與へない。そして成熟して来ると皆一緒に枯れ死んで、神様のお慈悲の露も受けないで、地獄の中に落ちて了ひ、其の名は此の世から消え失せて了ふ。が、妾は男々しい火性の人間は大好きで、之れには益多くの火性の強さを加へてやり、愈強い力を與へてやる。火性の人間は神さまの兒で幸福は持つて居るけれど、开れでも土性の人間の持つた幸福とは種類が違つて居る。とこの譯は！パアセアスよ、妾は火性の人間を奇妙な道から逐ひ出して神さまと人間との敵である巨神や怪物やと戦争をさせた。火性の人間に疑の心を起させて危い目を見せ、艱難な處を通らせたり又は戦争もさせた。で、其の火性の人間等の中には若盛りの花のやうな齡で殺された者も

ある。又高い名譽を得て目出度い齡を保ち得た者もある。が併し妾は其の人々の死ぬる前は何ういふ光景であつたか知らない。パアセアスよ、今、妾に此の二種の人間の内で、何方がお前には幸福のやうに思はれるか、云つて御覽。』

此の時パアセアスは憶した色もなく
 『羊のやうに安らかな生活をしたり、又は人に愛されもせず、名譽を得ることもなく、唯死なうより、寧ろ若い花のやうな齡で死んで了つても高い譽れを得るやうな勳功を立て、死にたい。』

愆ういふと、其の不思議な女は口許に笑傾けて、持つて居る真金の楯を高く指し上げて

『パアセアスよ、是れを御覽な。妾はお前に這麼怪物と向ひ合つて、それを殺して其の頭を此の楯の上に置いて貰ひたいのだが、お前に开磨勇氣があるだらうか』
 といふかと思ふと、聽て楯に着いた鏡の中には一個の顔が表はれた。其の顔を見て

バアセアスは恐しさに總身の血が冷め切つて了つた。

楯の鏡に映つて居るのは一人の奇麗な婦人の顔であつたが、其の婦人の雙頬は死人のやうに青褪めて居て、額には雙眉を集め、いかにも千年の苦痛の根跡が見える。兩唇は蛇のやうに薄くて、先は尖り頭には毛髪がない。其の代りに幾百千筋と數へ切れぬ程澤山な毒蛇が額額の周圍まで取り巻いて、又裂けた舌をべろ吐いて居る。それに頭に大鷲のやうな双翼が疊まつたまゝ着いて居り、胸には黄銅の爪が生えて居る。バアセアスは暫く其の光景を眺めて居たが、漸く口を開いて、

「若し此の世の中に這麼猛々しい恐い惡物が居たら、それを殺して了ふのは高尙な行為だと思ひますが、一体此の怪物は何處に居るのでせう。」

此の時、バラス、アスイネは又、微笑んだ。

「否、まだくお前は年が若い。物の熟練も足りない。此の怪物はメヂユサといつて怪物の母である。まだお前には爲すべきことがあるから、故郷に歸つてそれを爲す

が、いゝ、妾の雙眼で見て、お前にゴルゴン征伐が出来ると思はれるやうになるには、一先づ、故郷に歸つて、男らしいお前の本分を盡してお見せなさい。」

此の時バアセアスは尙ほ何か談話をしやうと思つたが、不思議にもバラス、アスイネの姿は掻き消すやうになつた。かう見て眠が醒めた。が其れは誠に一場の夢であつた。その後日となく夜となくバアセアスは、かの頭の周圍に毒蛇の巻き着いて居る奇麗な婦人の顔が眼の前に表はれて來るのを見た。

バアセアスは故郷に歸つた。セライフオス島に着いて先づ初めて聞いたのは母親がポリテクテス王の家で奴隷にされてゐるといふことであつた。

之れを聞くとバアセアスは口惜しくてたまらない。切齒をして怒り、王の御殿に行つた。

御殿では、男の居る部屋、女の居る部屋、その他、御殿中の各の部屋を殘らず捜し廻つた。其の權幕の凄じいのと容貌の奇麗なので、誰一人バアセアスを遮り留め

る者もなかつた。

パアセアスは到頭母が地床の上に坐つて、石の手臼を泣く泣く廻して居る處に來た。パアセアスは急いで母親を抱きあげて外へ出でやうとしたが、まだ、其の部屋を出切らない前にポリデクテス王が怒つて其處に表はれて來た。とパアセアスは獒犬の野猪に飛びかゝつて行くやうに凄しく王さまに躍りかゝつた。

「うぬ、畜生奴、それで貴様は神さまにすむと思ふか。慈悲ある行爲といへるか。此處で貴様を殺してやる。」

かうはいつた者の、パアセアスは軀に一寸の刃物も持つて居る譯ではない。で、其處にある石臼をおつ取つてポリデクテスの腦天めがけて勢威猛く振り廻した。

が、パアセアスの母は石臼を持つたパアセアスの腕に取り籠つて、

「あゝ、パアセアスよ、妾もお前も此の島の者ではない。で、此の島で妾どもを助け、て呉れる人としてはない身の上です。それなのに若し王さまを殺してもするやうな事

がある。と此の島の人民等は妾等を仇敵にして襲つて來るに相違ない。さうなると妾もお前も一緒に殺されて了ひます。」

其の時其の部屋に入つて來た慈悲深いデクテスは亦パアセアスに言葉丁寧、

「お前さん。此れは私の兄弟だといふことは忘れては下さるまい。私がお前さんを自分の子のやうに大切に育て上げ、訓練して來たといふことも覚えて居て下さるでせう。で、私に免じて私の兄弟の生命は助けてやつて下さい。」

恚う曰はれてパアセアスが振り上げた手は自然に下りて了つた。卑怯にも、戦慄して居たポリデクテスは自分でも、自分の行爲の悪いのは分つて居たからパアセアスと母親とは外へ出して了つた。

パアセアスは母親をアスィネの神の御祠に連れて行つて其處で尼僧に頼んで母親を殿堂の掃除人にして貰つた。恚うして置けばいかに無法なポリデクテスでも神さまの祭壇にお仕へ申す者を奪ひ取つて行くことはできないと思つたからである。毎日パア

セアスは母親を尋ねて行く、ヂクテスも其の妻と一緒に訪づれて来た。で、ポリデクテスも自分の王妃にしたいと思ふダナイも腕力づくでは到底取ることができないと思つたから、外に何かよい工夫はなからうかといろく悪い計謀を廻らした。

王はパアセアスが島の裡に居ては、到底、ダナイを奪つて取り返すことはできないと思つた。で、之れを除き者にして了はうと思ひ立つて、其の手初めに、先づ王は最らパアセアスを怨んで居な、ダナイのことは最ら悉皆忘れて了つたといふやうな風をして氣を休めさせた。

それで、暫時は其の儘に王とパアセアスとの間には波風も立たず、至極平和に治まつた。

第二の計謀として、王は其の島の主領や地主や青年等を招待して大酒宴の筵を開いた。其の時パアセアスも招待された。

酒宴の日には數多き人々が集つた。當時の習慣として、客は皆、贈物を持つて来て

王様に捧ぐる事になつて居た。で、鳥を贈物に持つて来る者があり、又、肩掛を持つて来る者があり、或は指輪或は劔と恠ういふ風で、开座者の持つて来れない者は葡萄酒を入れた桶だの獸類を詰めた樽だのを持つて来た。けれどパアセアスは高が貧乏な水夫風情に過ぎないので、何物一個贈物にするやうな者は持つて居なかつた。贈物も持たないで王さまの前に出る事は恥かしくないではなかつたが、彼れは敗けず魂の強い男である。祖父に當るヂクテスにさへ借りることもしなかつた。で、パアセアスは悲しさうな態度で戸牖の前に立つて、富有者の人々が贈物を持つて御殿の内に入つて行くのを見て居つた。富有者の方では亦パアセアスを指しては、嘲み笑ひ乍ら、

『あの棄て兒は何を持つて来たらう』。

と囁き合つて居る。それを聞くと、パアセアスは恥かしくて耳の根元まで赤くなつて来るのであつた。

ポリデクテス王はパアセアスのなんにも持つて居ないと聞くと、心に工んだ計謀に

かゝつたので、大變に喜んで、バアセアスを内に呼び入れさせた。バアセアスの入つて来るのを見ると王は澤山な人々の居る前で、輕蔑んだ調子で尋ねたのは、

「バアセアスよ、お前は私の臣だらう。今日私はお前を酒宴に招いたのだが、何を土産に持つて来て呉れたのだ。」

バアセアスの顔の色は直赤に染まつた。口は嚙嚙して言葉が云はれない。此の時周圍に居た澤山な倣り高ぶつた人々は大口開けて笑ひ、中には露骨にバアセアスに嘲弄ひ初めた者もあつた。

「此の男は雜草か浮木のやうに此の島の濱に打ち上げられた者だ。でも大膽者だ、王さまに招かれてお土産も持たずに來るとは。」

「それに此の男の父親は那麼者か分りもしない癖に無益いことをしては、お婆さん等を誤魔化して、神さまの子息だなんて呼ばれて居やがる。」

其の他、まだ、いろく悪たはれて衰れたバアセアスは恥かしたに氣も狂ふばかり

であつた。で、自分では、何をいつて居るか分らない位。

「贈物！誰だ、开座事をいつて居るのは。おれの持つて來る者はお前方の持つて來た者を皆集めたつて叶やせぬ。今に見て居やがれ。」

と恚う傲然と云ひ放つた。バアセアスは自分の心では、自分は、今此處で自分を嘲けつて居る總ての人々より自分の方が尙勇取で、そして大きい仕事の出來る人間だと思つて居るのであつた。

「あの男の云ふことを聞いて、御覽よ。何と云ふ法螺吹なんだらう。」

此の時不圖サモス島で見た夢がバアセアスの胸に浮んで來た。で、バアセアスは聲高く、

「ゴルゴンの顔をよ。」

と、恚う云ひ放つた者の、何んだか自分でも自分で云つたことが空おそろしくなつて來た。周圍の人々は前よりもつと聲高に笑ひ、就中ポリテクテス王の聲が一番高

く聞えたのである。

「何に、お前がゴルゴンの頭を持つて来る。よし、確かに約束したナ。ちや、それを持つて来るまでは此の島に居ることはできないぞ、早く出て失せろ。」

パアセアスは王さまの計略にかゝつた事が分つて切齒をして怒つた。が、唯つた今約束した計りである。で、最うなんにも云はないで、パアセアスは其處を去つた。

断崖の方へ下りて行くと、向ふには渺茫した沖が見える。其處に立つてパアセアスは彼の日の夢の眞實であつたことを不思議に思つて、其の悲しい心で、神さまにお祈をした。

「パラス、アスイネよ。私の見た夢は眞實なのでせうが。私にゴルゴンが殺せませうか。若し貴女が眞實に私にゴルゴンの顔を示して下さると私も虚言吐だの法螺吹だのといふ恥辱は免れる事ができます。私は怒りに任せて、軽卒な約束をしてしました。が、私は智慧のあるだけ出して、悔まず、撻まずに働いてそれを仕遂げて見

せませう。」

憊う云つて見たけれど、一言の返事の言葉もなければ、又、何にの表象も見はれぬ。雷霆の響も立たねば、空の雲一つさへ動かないのであつた。

で、三度、パアセアスは泣く泣く叫んだのである。

「怒りに任せて、私は軽卒な約束をしました。けれど、智慧のある丈け出して悔まず撻まず仕事を仕遂げて見せませう。」

此の時、パラス、アスイネは遙か離れた沖の方に白銀色に輝いた白雲の一片浮んで居るのを見た。白雲は次第に此方に近う寄つて来て、眩しくてたまらないやうになつて来た。

其の白雲を見てパアセアスは心に驚き怪んだ。空には他に雲ごては一片もない。其の不思議な白雲は益低く降りて来て断崖に觸れるばかりになつた。パアセアスは唯戦慄しながら見て居ると、白雲は断崖に觸れて頓て碎けて分離散落になり、其の中か

ら、サモスの島で夢に見た通りのパラス、アスイネが、牝鹿よりも軀の光つた、雙眼からは火花でも散るかと思はれる計りの若い男と一緒に表はれて来た。男の腰には高貴い金剛石で飾りのしてある曲剣を佩け、雙足には踵に羽翼の着いて居る黄金の靴を穿いてゐた。

パラス、アスイネと其の男とは、仔細にパアセアスの姿を見て居たけれど、二人とも、其の眼睛は動いて居ない。臆て幕然に海鷗の飛ぶより早く二人は断崖の上なるパアセアスの方へとかけて来た。が、开れども、二人は歩くに決して其の雙脚を動かさない。微風に吹かれ乍ら二人の着た衣服は袖さへ揺れぬ。只若い男の穿いた靴についた羽翼ばかりは、断崖の上を飛び翔ける鷲の雙翼のやうに動いて居た。

パアセアスは此の光景を見て、此の二人は人間ではないと思つて、其處に倒れたまま口の裡でぶつく／＼何か呟いて居た。

パラス、アスイネはパアセアスの前に立ち停つてパアセアスに物優しく恐がらない

やうに云ふた。

『パアセアスよ、一つの試験に打ち勝つた者は其の勳功で更に六ヶ敷い試験に遭ふ者だ。お前は既にポリテクスに挑みかゝつて反抗した。お前は是れからゴルゴンのメヂユサに挑みかゝつて行く勇氣があるかい』
と恚うきかれてパアセアスは返答して、

『私を試験に遭はして下さい。貴女がサモスの島で私に話をして下さつてから、私の胸には新しい精霊が湧き出て来ました。私は人間が自分の力で出来ることをやらな
いで置くのは恥づべき事だと思ふやうになつて来ました。何うしたら私はメヂユサ
を殺せるでせう』

アスイネは、

『パアセアスよ。お前は物の計書を立てる前によく其の物事を考へて見なければいけない。此のゴルゴンを殺すには七年の長い旅をしなければならぬ。其の旅の途中で

は、這座事を初めねばよかつたと後悔したり後退りしたり逃げ出さうと思つたりしても最う其の時は追つかないのだから。若しお前が途中で勇氣を挫いて了へば、お前は無形島で死んで了つて其の骨は誰も拾ひ上げて呉れず、其處に朽らて了はなければならぬのだから。』

「何も得爲ないで徒らに人に輕蔑されて此の島に居るよりも其の方が余程勝つて居ます。何卒教へて下さいませ。尊い女神さま。貴女さまの御親切でお慈悲深いことに對しても何うしてもこれは仕送げてお目にかけてます。又、死ぬべき時には生命を捨てゝも構ひませぬ。』

ど、バアセアスがいふと、アスイネは微笑んで、

「まあ我慢して妾の云ふことをお聞きなさい。若し妾の云ふたことを忘れると必ずお前さんは殺されて了ひますぞ。お前さんは北極の先きにある北風の源に住んでゐるハイポレアの國に行かねばならぬ。其處には三人で一個の眼と一本の齒とを持つ

た灰白色のお化生の姉妹が住つて居る。お前さんは其の姉妹に女神さまの處に行く道はどれかと聞いて見なさい。女神さまは、夕星の娘で大西洋の中にある島に住つて居て、黄金の樹の周圍を跳り廻つて居ます。三人の姉妹はお前さんにゴルゴンの所に行く道を教へて呉れます。それで、お前さんは妾の警である怪物の母ゴルゴンを殺すことができるのです。ゴルゴンも初めは曉の空のやうに色の美しい處女であつたのだが、性質の傲慢であつたため終にお日様も顔を背叛るやうな罪障を犯した。それで其の日から頭髮は毒蛇となり雙手には怒の前足のやうな爪が出来、心は常に恥辱と憤怒とで一杯になり、兩唇には烈しい毒氣を含み雙眼は見る者を悉く石にして了ふといふ位大變怖い者になつたのです。雙翼のある馬の形をして黄金の劍を持つた巨人は其のメヂュサの子で、魔法使の毒蛇のエチトナと、地獄の牧草で飽き足らず、妾の牧草まで食へて居る三頭の虐主キリーオンとはメヂュサの孫です。メヂュサは海の女王の息女のステイノ、エウリラといふ恐い怪物等と姉妹の縁

を結んだ。彼等は皆人間ではないのだから、其の軀に觸つてはいけない。妾には只メヂユサの頭だけ持つて来て呉れ、ばそれでいい。』

バアセアスは

『では、私は開れを持つて参りませう。が、どうしたらゴルゴンの雙眼を避けて、見られないやうにすることができませうか。私の軀も石になつて了ひはしないでせうか。』

といふと、アスイネは

『お前は此の磨いた楯を持つておいでなさい。ゴルゴンの側に行つたら、彼女を眞面に見てはいけない。只鏡の面に映るメヂユサの姿だけ見て居ればよい。すると譯もなくメヂユサを打ち取ることはできる。頭を取つて了へばお前は顔を外向けて居つて其の楯に着いて居る山羊の皮の中にくるんで了ひなさい。其の山羊の皮は大神さまの楯持アマルチイユの皮です。さうすれば、安全に妾の所にメヂユサの首を持つ

つて來ることができません。そして高い名譽を得て、オリンプスの山の風も靜かな嶺に神さまと祭られた諸勇士等の仲間に入ることができません。

此の時バアセアスがいふには

『假令私は途中で瘡れて了つても構はない。一つ行つて見ませう。併し私は船も持つて居ないのに何うして海を越えて行かせう。又誰れが私に其の行く道を教へて呉れるでせうか。私がメヂユサに遭つたとて若しメヂユサの皮が鐵のやうに固かつたら何うして殺して了ふことができませう。』

此の時一緒に來た若い男神は

『私の持つ此の靴を穿いて行けば空飛ぶ鳥の如に、海も岳も踏も越えて行ける。是れを穿いて私は一日海の上を踏んで居たのです。私はオリンプスの山に住み玉ふ神さまの御使者をして居るもので、かのアルガスを殺して名高くなつたハーミーズといふ者です。』

此の言葉を聞くと、パアセアスは跪いて禮拜をした。男神ハーミーズは再び物語を初めた。

「此の靴が案内して行きます。此れは神様の尊い靴で之を穿けば路の分らなくなる氣遣はない。此の劔はアルガスを切つた劔で、ゴルゴンも亦是れで殺す事ができます。此の劔も神さまの貴い御劔であつて、何者を切るにしても二度と使ふことはない。さあ、此の靴を穿いて此の劔を持つて出かけなさい。」

パアセアスは起ち上つて、靴を穿き劔を持つた。アイスネは聲を隠まして

「サア、早く此の斷崖から身を躍らせて、お立ちなさい。」

けれど、パアセアスは逡巡した。

「私は母親とヂクチスとに別離をして來たいと思ひます。私は亦、貴方さまやハーミーズさま、それから、上天の父チユース大御神さまに燔祭が捧げたいので御座います。」

「お前はお母さんの悲むのを見ると心がたゆんで來るからお母さんの所に暇請に行くのは廢した方がいゝ。妾はお前が無事に歸つて來るまではお母さんとヂクチスとを慰めいたはつて置いてあげるから。オリンプス山の神々さまに燔祭をあげるには及ぶまい。お前のあげる供物としてはメヂユサの首が何よりだ。さあ、此の斷崖から飛んで行つてお了ひなさい。神さまの劔や靴を身につけて。」

パアセアスも流石斷崖の下を瞰いて見ると戰慄えて來る。が、憶病な心を人に見するのには恥である。で、メヂユサの事、我が身の名譽の事ばかり考へて、颯然と身を躍へして空を蹴つて跳り出した。

果して、身は下に落つることなく、浮いた鳥のやう宙宇を驅けることができるのであつた。後方を振り返つて見た時には最うアイスネの姿もハーミーズの姿も消えて見えなかつた。パアセアスは穿いた靴に導かれてアイスターの澤地をさして北方へ北方へと、春を追ひ行く鶴のやうに行くのであつた。

(その参) ゴルゴン征伐

さても、其の後、バアセアスは故郷を立つてからといふものは、唯の足一つ濡すことなく、無事に陸を越え海を渡つて行くことができた。それで、心の内では込み上げて来るほど愉快で嬉しくてたまらない。七日の間、羽翼の着いた靴はバアセアスの軀を落ちないやうに宇宙に保つて居た。

バアセアスはシスヌスに沿ひセオスに着いて大變景色のいろシクラテス群島を辿つてアツチカに來た。此處から更に進んでアゼンスやテーベスやコペイク湖を経てセフイツサスの雞間に至り、イタヤピンタスの嶺嶺を越え、肥沃なセツサリーの平野を過ぎ行くと、終に太陽の光の温い希臘の岳を後に、前には一面の北方の曠野が開けて來た。其處からスレシアの諸山を超え、セリオンス、ダルダネス、ツリバリなどいふ數多き野蠻種族を瞰下してアイスター河の畔を過ぎ、眺望寂しいミアアの平野に來た。

夜晝の差別なく驅けて驅けて、風寂しい西北に眞直に行くと終に名も知らぬ無形島に出た。

恚うして七日間翔け續けたのであるが、其の辿つて來た道筋は到底お話のできないほどであつた。其處から更に尙々翔けて到頭夜見の國の境まで來た。其處は空の黒くなるほど鳥が群れて居て、地には氷が堅く閉ぢて居た。

其處では三人の姉妹が白い浮木に乗つて冬の夜の冷たい白い月の光の下で互に何か黙頭き合つて居た。

此の三人の姉妹は低い聲で一緒に歌を歌つて居る。その歌は、

『逝きにし世は楽しくて、今現身の世ぞ悲しき』

周圍を見ても、生きて動く者としては一匹の蠅すら居ない。岩には一本の苔も生えて居ず、海豹や海鷗は氷に足を取られるのが恐いのか側に寄り付かない。只立つ者は海溝ばかり。波崩れては白い泡と湧き、飛び散つては繽紛白雪の花と降る。と、其れは

又、三人の姉妹の頭の髪と頭の上の岩とにかゝつて氷り付くのであつた。三人の姉妹は共通の一個の眼で代る交る物を見やうとした。けれど見ることはできなかつた。夫には其の一本の齒を交る代る使つて物を食べやうとしたけれど、それもできなかつた。三人の姉妹は月の光の皎々牙え切つた中に坐つて居て、世の中には月の光ほど温い者はないと思つてゐた。バアセアスは其の様子を見て、三人の姉妹を不惑な者であると思つたが、彼等は自分で自分の事を聊かも惑れとは思つて居ないやうであつた。バアセアスは曰つた。

『あゝ尊い姉妹等よ、智識といふ者は老人の生んだ娘だといふことだから貴女等はいろくの事を知つて居るに違ひない。何卒、ゴルゴンの居る所に行く道を教へて下さい』。

一人がいつた。

『妾等を老人だなんて、人を馬鹿にして居る。一体誰だよ』。

バアセアスは

『私が貴女等を老人と云つたのは、決して馬鹿にした譯ではなくて、反對に尊敬して云つた積です。私は數ある勇士の中の一人と數へられて居る者です。が、今、オリンプスの山の神さまが貴女等にゴルゴンの所に行く道を教はれとて私を此處に遣つて下さつたのです』。

此の時一人

『此の頃、オリンプスの山には澤山新しい神々さまがお出でになるといふことだ。一體新しい者に佳いものはない者だ』。

又他の一人

『妾等はお前さん等の支配者や、又諸勇士や、その他、總て人間の子供といふ奴は嫌ひさ。妾等は悪魔とかシャイアントとかゴルゴンとか又其の他深い山や暗い谷に住む古い魔物共の眷屬なのだから』。

又他の一人

三八

「許しもないのに、黙つて妾等の領分内に入つて来るなんて、傲慢な奴は何者ぢや。一番最初に口を切つた者が」

「我々の住んで居るやうな這磨い、世界は何處を捜したつてありはせぬ。從來とてもさうだが此の後とてもない。若し吾々が此の土地を這磨奴に見せやう者なら悉皆奪ひ掠つて了ふかも知れぬ。」

此の時又一人が叫ぶには

眼を貸してお呉れよ。什麼奴か一つ見てやらう。」

すると又一人が

「齒を貸してお呉れよ。彼奴に噛み付いてやる。」

バアセアスは三人の姉妹の性質の愚味で、傲慢で、人間を愛する心のないことに気が着いて来て、彼等を憐むの心は失くなつて了ひ、獨りで

「お腹の空いた者はぐずぐずしては居れない。此處で無益なことをいろく饒舌つて居ると私は餓え死をして了ふ。」

で、バアセアスは三人の姉妹の側近う進み寄つて三人で一個の眼を次ぎ次ぎに貸し合つて居る有様を終りまで見て居たが、摸索りに一巡り廻し終つた時、バアセアスは一方の手をそつと出した。すると一人はそれを姉妹の手だと思つて掛け代のない眼をバアセアスに渡して了つた。バアセアスは小躍して喜び笑ひながら叫んだ。

「人情知らずの傲慢な婆々奴、お前らの眼は最う此方の手に入つて居る。若し汝等がゴルゴンの處に行く道を教へて、其の言葉に欺りのないことを誓はなければ此の眼は海の中に投り込んで了ふぞ。」

此の時三人の姉妹は泣き悲んでがやく罵り騒いだ。けれど其の効なく、終に眞實のことを告げなければならなくなつて了つた。其の語る所を聞いてバアセアスは漸くゴルゴンの所に行く道を知ることができた。

三人の姉妹の言葉は

四〇

「愚かな人の子よ。お前さんは南をさして、太陽の醜い光りの輝く中に入つて行かねばならぬ。すると、終にお前さんは天と地とを別けて支へ持つて、地に跪いで居る巨人アトラスの所に行き着くだらう。其處には巨人の息女でお前さんと同じやうに愚味な年若いヘスプリラスといふのが居る。其の息女に路をさしなさい。さあ、最う眼は戻してお呉れよ。妾等は此れより外の事は皆忘れて了つて分らなう。』

バアセアスは眼を返した。けれど姉妹は其の眼は使はないで頭をふらくさせて居たが、到頭寢入つて了つた。すると、其の姿は三個の氷の塊となり、聽て潮水が来て開れを洗ひ去つた。爾後、氷の塊は氷の山のやう何時までも彼方此方に漂ひ廻つて居て、太陽の光線に照らされるたびに、菓實の實る夏が来るたびに青年の胸に思ひの溢るゝ暖い南の風の吹いて来るたびに何時でも泣き悲んで居る。

が、バアセアスは雪や氷は後にして南方をさして翔け、ハイボレポレイア人の住んで居る嶋や錫の出来る島々や、目路も遙かに續くイベリアの長い海岸を過ぎて進み行くこと、太陽は一日一日と中空高く上り、燦然と輝いて水色の青い夏の海を照らして来た。鱗刺だの海鷗だのいふ鳥は頭の上を樂しさうに飛び翔げつて居て、バアセアスにも此處で一緒に遊んで行けといふ。行く手には海豹が踊り戯れて居て、それがバアセアスを背ふてやらうといひだした。夜は一晚ちう、海に住む仙女等が聲も可笑しく歌ひどよめき、トライトンたちは眞珠貝の輦に乗つて、女王のカラテリアを取り巻いて演伎をしては貝殻を吹き立てゝ居た。

日か經つにつけて、愈太陽は中空高く登つて来るが、夜になると忽然、海にかくれて了ひ、夜が明ければ又、忽然海の面から登つて来るのであつた。此の時バアセアスは、海鷗のやうに、狂ひ立つ大波の上を掠めて翔けたが、脚一つ濡れなかつた。波から波へと躍り越して行くが少しも疲れない。翔り翔つて行くこと、終に、遙か彼方に没日に染まつて眞赤になつた大山の聳えて居る姿が見えて来た。その山の麓は鬱蒼した

森に取り包まれて居て、頂には白雲の花冠を被つて居る。バアセアスはそれが天と地とを分けて捧げ持つて居るアトラの住居だと思つた。

バアセアスは其の山に着いて陸に上がった。面白い谷々や瀑布や又高い樹木、奇異な羊齒、奇妙な花の中を彼方此方逍遙ひ歩いて居たが其處には一穂の煙も立ち上らない。谷からも人家からも、又人のけはいさへもしなかつた。

彼是する内、奇麗な歌聲が聞えて來た。でバアセアスは此處が宵星の息女の居る花苑だと思つた。

叢の裡では、仙女等が鶯の囀るやうな佳い聲で歌つて居た。バアセアスは足を留めて、歌を聞いて見たが、何を歌つて居るのか其の意味は少しも分らない。で、バアセアスは進み出で、其處を窺いて見ると仙女等は手を取り交して黄金色の菓實の枝もたわゝに熟して居る奇麗な樹の周圍で躍り廻つて居る。が、其の樹の根もとにはドラゴンといふ毒蛇が龍巻を作つて蟠り、昔から晝となく夜となく睡りもせで、處

女等の歌を聞きつゝ、濕味のない燦然した眼を瞠つてゐるのであつた。

此の時バアセアスは立ち停つた。それは其の龍が恐ろしかつたからではないので、奇麗な仙女の前に出るのが辱かしかつたからである。仙女等もバアセアスの姿を見ると立ち留まつて、震へ聲で呼びかけた。

「貴郎は何うした方です。此の花園を荒したり、黄く熟した菓實を採うとするのは。若しや貴郎はヘラクルスといふ勇士では御座りませぬか。」

バアセアスは答へた。

「否、私はヘラクルスではない。又菓實が欲しくて來た者でもない。奇麗な姫さん方よ。どうか、私にゴルゴンの居る處に行く道を教へては下さいませぬか。是れから私はゴルゴンを殺して來やうと思ふのです。」

「さう、でも、まあ、开座にお急ぎにならなくてもよいではありませぬか。奇麗な男子様、さあ、此處で妾等と一緒に此の樹の周圍で躍りをしやうではありませぬか。」

此處は冬の來ない何時でも暖かい南風の吹いて居る國です。此處で暫時妾等と躍つて居て御覽なさい。妾等は千年といふ、それはそれは長い間、他人交せず躍つて居たので、今では一人でもよい、専ら輩が欲しくて仕方のないほど寂しいのです。ですから此處に留まつて居て下さい。さあ』。

『奇麗な姫さん方よ。私は神さまのお吩咐を仕果せねばならぬ身ですから、貴女等と此處で一緒に躍りをして居る譯にはいけません。それで、私が波の上を漂ひ廻つたり、又は海底の藻屑となつて了はないやう、ゴルゴンの居る所に行く路を教へて下』。

此の言葉を聞いて、仙女等は溜息を吐いて泣き悲んだ。

『ゴルゴンと仰しやるのですか。あれに遭つたら貴郎は石になつて了いますぞ。と仙女等は云つた。バアセアスは

『神さまはそのため私に武器を授けて下さつたのです』。

と答へると、女神等は又、溜息を吐き吐き。

『奇麗な男子様よ。貴郎が死んでもよい、無理にも行きたいとお希望なさるなら、詮術がない。妾等はゴルゴンの處に行く道筋は知らないのだけれど、妾等の父白銀の背星とは同胞のアトラスといふ、巨人が幸に高い山に居て、常に大洋の沖を眺めて居るから、其の人なら無形島のことは能く知つて居る。其の伯父にでも聞いて上げませう』。

と憚ういつて、仙女等は山に登つてアトラスの居る所に行つた。バアセアスも隨つて登ると其處には一人の巨人が跪いて天と地とを分けて支へて持つて居る。

仙女等がアトラスに尋ねると、アトラスは其の巨きな手で向ふに開けた海面を指して言葉やさしく答へた。

『遙か向ふの方にある島にゴルゴンが寝て居るのが此處から見える。けれど、此の前年は暗色の帽子を被つて、他に分らないやうに身を隠して居ないと、到底ゴルゴ

の側には近寄れない。

バアセアスは叫んだ。

『されば、开魔帽子は何うしたら得られませう。』

巨人は微笑を浮べて、

『其の帽子の所在を知つて居る者はありやしない。冥い地獄の底にある者だから。けれど、私の處の姫達は人間とは違ふから、若しお前さんが、私に一事誓つて必ず開れを守つて呉れるなら、其の帽子は姫達に取つて來らせて上げててもよい。』

バアセアスは其の云ふなりに誓をしやうといふと、巨人は

『其の誓といふのは！お前さんがメヂユサの頭を討取つて歸る時一寸、私にそのメヂユサの綺麗な凄顔を見せて貰いたいのぢや。さうすると私は嬉しいとか悲しいとかいふことの區別もなく、生命もない冷たい石となつて了ふ。天と地とを別つて支へ持つなぞいつても骨が折れて骨が折れて、最う私には我慢がし切れなくなつた。』

と慄ういつたので、バアセアスは其の云ふ儘に約束をした。聽て一番年上の仙女が斷崖の中の暗い洞穴に下りて行つた。此の洞穴は地獄の入口で、其れからは煙が立ち昇り雷が聞えて居る。

バアセアスは其處で身慄をし乍ら、帽子取りに下りて行つた仙女の歸つて來るのを待つて居た。七日経つて歸つて來た仙女は顔の色は蒼褪めて了つて、大陽の光に當るいかにも眩しさうな眼つきをして居る。それは長いこと、大陽の光も通はぬ物凄いや闇の中に入つて居たからである。併し手には暗い色の不思議な帽子をば持つて歸つて來たのであつた。

仙女等は皆バアセアスに接吻をして長いこと名残を惜んで泣いた。が、バアセアスは前途を急いで、氣が逸くので、仙女等も仕方なく到頭其の暗色の帽子を渡してバアセアスの頭に冠せてやつた。それでバアセアスは勇ましく其處を出で立つた。が、バアセアスの行く手に見える者とは、何處も何處も面白くもない景色ばかり。彼是し

て、大分遠くまで来たと思ふと其處はやがて大洋の潮の流れの絶れた無形島の中央であつた。其の地には一隻の舟も巡つては航す、夜と晝との區別もなく、萬物が紛然に亂れて秩序がない。而して其處の物には何一つとして名のついた者はないのであつた。其處を更に先きに進んで行くと、終にゴルゴンの雙翼の羽すれの音が聞えて来て、廳で黄銅の巨爪の煌々と輝いて居るのが見えて来た。で、バアセアスはメヂユサのため石になつてはならぬから、深要慎くして、其處に足を留めた。

バアセアスは足を留めて暫く思案に暮れて居たが、其の時アスィネの訓誡が胸に浮んで来た。それで、空高く翔け登り、楯についた鏡を頭の上にかけて、下にある者の悉く其の鏡に映つて来るのを仰向いて見て居た。と、鏡の面には大きな象ほどもあると思はれる三個のゴルゴンの臥せつて居る姿が映つて来た。バアセアスは暗色の帽子を被つて居るので、ゴルゴンに姿を見附けらるゝ心配はないと知りながら、下に降りて側に行く時には、其の黄銅の巨爪の恐ろしげなのに流石、身慄ひがして来た。

三個の内、二個のゴルゴンは其の汚い事豚のやうで、重さうな大きい雙翼を廣げた儘熟睡して居る姿も豚の寝て居る形どそっくりである。メヂユサは切りと前後に轉轉つて居る。

此の光景を見て、バアセアスは可哀さうでたまらなくなつた。其の顔は仙女かと思擬ふほど奇麗だが、何處となく、其の内に物悲しげな處がある。双翼は虹のやう、只其の肩が燦んで居て、兩唇は堅く結び、限りない心配と苦痛との影を宿して居る。鏡の面に映つた顔の余り細くて色が白く美しいので、どうしてもバアセアスは开れを撃ち取る氣にはなれなかつた。で、バアセアスのいふには、

『あゝ、此の三個は何れも皆、姉妹であつたのに』。

けれど尙は見詰めて居ると、其の縮れ毛の中から無數の蛇が頭を擡げ、乾いて潤みのない煌々する眼で此方を見て、白い齒を出しては嚙々と鳴いて居る。メヂユサが轉轉るとき其の羽翼は背中に翻り黄銅の巨爪が表はれて見える。バアセアスはメヂユサ

は容貌こそ奇麗なれ、矢張他の二個の姉妹と同じ、汚ない害をする怪物だと思つた。

バアセアスは空から下りて、大膽にもメヂユサの側近く進み寄つて、確乎と鏡の面を睨み詰めて、ハーミーズから貰つた神さまの劔ベルペで一度強く打つた。劔はハーミーズの話しの通り二度使はないでもよかつた。

此の時バアセアスは顔を横向けて眼を逸らし、手早くメヂユサの首級を野羊の皮につゝみ大急ぎで空にかけ登つた。

メヂユサが殺されて巖の上に倒れた時、双翼と巨爪との音がしたので、他の二個の汚いゴルゴンが眼を醒ました。と、其處にはメヂユサの死骸が横はつて居る。

二個のゴルゴンは大聲を立てながら空中に翔け登つて、バアセアスの行方を捜すのであつた。鷓鴣を撃つ荒鷺のやうに輪を書いて、二個のゴルゴンはくるくろと翔け廻り又、三たび許り、牝鹿を追ふ獵犬のやうにあたりを嗅いて廻つた。と、終に空中に鮮血の嗅を嗅き附けたのである。で、暫時、身動きもせず静かにして、方角でも見確か

むるやうであつたが、臆恐てるしく狂はしい聲を立て、突き進んだ。其の時双翼が鳴つて強い羽風が起つた。

二個のゴルゴンははたくと翔けて、禽を追ふ鷺の如く進む。バアセアスも勇氣を勵まして翔けた。けれど、ゴルゴンの猛り狂ふて進んで来るのを見ると流石に總身の血が凍るやうであつた。叫んでいふには

「勇ましい靴よ、今、確乎と私を保つて翔けて呉れないと死の犬が最う踵に追ひ着くばかりに迫つて居る。」

靴はバアセアスを確乎と保つて、高い高い雲の居る中や、太陽の光の中を貫けて涯岸も知らぬ海原を横断つた。二個のゴルゴンも羽風凄しく速翔に後を追ひかけたが、其の双翼の鳴る響は漸く微かに次第に細くなつて、終にバアセアスには聞えなくなつた。ゴルゴンもバアセアスの靴には追ひ附くことができず、余程後に離れて來たのである。

空の薄黒く黄昏れかゝる頃にはゴルゴンの姿は遙か後の南の方の空で僅か二個の黒斑と見えだが、太陽が入つて了ふと、開れさへ見えなくなつて了つた。

かくて、バアセアスは再び、アトラスの許に歸り着いて仙女等の居た花園を尋ねて行くと、其處には、巨人アトラスが居て、バアセアスの穿いた靴の響を聞いて呻吟さし、呻吟さいふには、

『お前さん、私にした約束は忘れはすまいな』。

バアセアスはゴルゴンの頭を巨人アトラスの前に差し掲げて見せると、巨人は其重荷を悉皆卸ろして了つて安らかな身となり、軀は石と變つて、雲の上で永久に醒めない眠りに入つたのである。

それから、バアセアスは仙女等にいろく禮をいひ、且つ尋ねていふには

『私の故郷に歸るのは何の道をつたら宜しいのでせう。私が此處に来る時は大變迂回路をして方々を迷ひ歩いたが』。

憊う聞かれて仙女等は泣き悲んで叫んだ。

『最う故郷には歸らないで、此の地に留まつて妾等と一緒に遊んで居て下さい。妾等は神さまからも人間からも遠く隔つて居て、常住も常住も寂しく住はなければならぬ身ですから』。

けれどバアセアスは其の願を聞くことはできなかつた。それで、仙女等は彼れに道筋を教へていふには

『貴郎に不思議な菓物を一つ差し上げませう。此の菓物を一度食れば、七日間お腹の空くといふことはない。東の方へ東の方へと何處までも寂しい濱を越して行けばよいのです』。

憊ういつて、仙女等はバアセアスに接吻して、名残を惜んで泣いた。が、バアセアスは身を躍らして山を飛び下り、海鷗のやうに翔けて、姿は次第に細く次第に微かになりつゝ、海の彼方へと去つた。

(その四) 凱旋の路

バアセアスは海を超えて行く事幾里か。北方へ翔けて遂にうねく波形に沙丘の立つた物寂しいリビアの濱に出た。其處から沙漠を横断り、岩礁を超え、海岸の砂礫を渡り、砂原を歩いて、太陽の光線の中に洗ひ洒げた介殼や巨大な海獣の骨骸、大古のまくの海岸に其處此處と撒布つて居る大古の人間の枯骨の間を翔けて行くと、其の路、ゴルゴンの頭から血の雫が滴り落ちて、それが蝮虫や毒蛇となつた。蝮虫や毒蛇は其の沙漠に今日でも残つて居る。

バアセアスは沙漠を越えて行く行く道すがら、仙女等から貰つた菓物を食べた。其の後、その位遠くまで来て、何日経つたのか分らなかつたが、終にプシリ人の住つて居る丘陵が見え矮人が鶴と相摸をとつて居る處に出た。見ると、其の矮人等の使つて居る槍は蘆や燈心草で、家は鶴の卵の殻であつた。バ

アセアスは可笑しくなつて来て笑つた。其處を尙、北東の方に終日翔けた。地中海の青く波立つ水が、バアセアスの心では見たくて堪えられないのであつた。地中海を越ゆれば、本國には最う飛んでも行けるほどに近いのである。

が、生憎にも、其の時大風に遭つて、バアセアスは南方の沙漠に吹き戻された。大風に逆らつて進まんと終日強いて務めて見たけれど、雙翼の着いた靴でさへ、風に勝つことはできなかつた。バアセアスは終夜、風に漂ひ廻る外はないのであつた。

北方からは強い風が砂塵を捲き立て、バアセアスの方に吹き着けて来た。砂塵が紅の血の色の柱か冠かのやうに飛び集るので、太陽の光も暗くなるのであつた。バアセアスは焼け砂に咽せて死んではならないと思つて、颯風を避けたのだが、到頭其の風も静まつた。それで、バアセアスは復た北方へ行かうとして見たが、其の時復たもや、砂暴風が起つて来て、バアセアスを荒れ果てた砂原に吹き戻した。が、暫時すると其の風も収まり、萬籟は静かに、空には以前のやうに雲翳もなく、晴れ晴れして來

た。七日の間、バアセアスは暴風雨に逆らふて見たが、七日ながら敗けて、進めば元に吹き戻されるのであつた。終に渴と餓との爲めに、身に力がなくなり、舌は上顎に沾り着いて來た。其處此處で何んだが美しい湖があつて、其の水の表面に太陽の光の映つて居るのが見えるやうな氣がしたが、さて其の處に行つて見れば、只燃ゆるやうな熱い砂があるばかり、若しバアセアスが神さまの眷屬でなかつたら、生命は此の荒れた原の中で、なくなつてゐたであらうが、バアセアスは人間よりも賢い者であつたから生命には障りがなかつた。

此の時、バアセアスはアイスネにいふには、

「あゝ、奇麗な清らかな神さまよ。若し御神様が私のお願を聞き取つて被下るなら、私を此處で殺しはなさるまい。私は神さまのお吟附で、ゴルゴンの頭を取つて、今此の通り持つて歸る途中であります。今日までは神さまのお蔭で、無事に旅をして參りました。それを神さまは最う終り際といふ處になつて、私をお見捨てになるの

でせうか。でなくば、何故、神さまはあの荒い砂漠の風には勝たせて下さらないのでせう。私は最う一度母の顔が見たい。セラインオス鳥の周圍に立つ色青い小波や太陽の光、温い希臘の山々も見たい。御座います。』

憊ういつてバアセアスは神さまにお祈りを捧げた。が、お祈りを終つて了ふと、應て周圍は静まり返つて物の響もしなくなつた。でも、頭の上には天が蓋ひ足の下には地が廣がつて居る。

バアセアスは仰いで空を見たが其の青碧の色の中に唯目を眩すやうな太陽がかつて居るばかりである。下を見ても只目の盲れる許りの熱い砂があるのみである。バアセアスは暫時、其處に静かに留まつて待つて居ていふには、

「私が此處に來たのは何か神さまにお考があつてに違ひない。アイスネの神さまは決して虚言を仰しやるやうな方ではない。此の靴は私を正しい路に案内して行く筈である。すると私の行かうとした路は間違つた路であつたのか。』

此の時、不圖、潺湲流るゝ水の音が聞えて来た。

バアセアスは虚耳ではないかと自分で疑ぐつて見た。が、心は最う嬉しさに躍り上つて来た。

其の軀は疲れ切つて最う起つことさへ容易くないほどであつたが、水の音に觸れられて、俄かに前に進み出たのである。と、前には谷があり、大理石の巖や、柿の樹や、灰白色の草繁き芝地もあつた。芝地の中を流れる小川の水は煌々輝いて、樹立の中を貫け、うねり／＼流れて末は沙漠の中で消えて居る。

水は巖の狭間を激しつて流れる。楽しい風は乾いた柿の樹の枝に音を立て、鳴る。で、バアセアスは楽しくてたまらなくなり、口に笑を含んで斷崖を駆け下り、清冽な水を掬つて飲むやら柿の實を食べるやらして、芝草の上に寝入つた。眠が覺めると起き上つて再び旅を續けた。けれど、今度は北を指しては行かなかつた。それはバアセアスが、

『私が這麼處に来たのはアイヌの神様の爲されたことに違ひない。これはまだ私を故郷に皈して下さらぬ積りなのだらう。併し希臘に歸る前にすることがあるとする』と開れば何だらう。

と、獨り言を云ひ乍ら、バアセアスは東をさして何處までも何處までも、新鮮なオアシスや泉水や柿の樹や芝地やに沿ふて行くと、終に没日に照らされて薔薇色の紅に染まつた一大山壁が眼の前に表はれて来た。

此の時バアセアスは鷲のやうに空中を逍遙ふて居たが、其の山壁の形を見ると、元氣は再び本に歸つて来た。で、山を越えて遠く遠く翔けたのであるが、終に其の夜も明け初めて、薔薇色の指を持つたエロスが空に紅の色染めて昇つて来た。見ると下にはエジプトの長い緑の色の花園やナイル河の燦然光る水の流れが見え、又、雲漢に突き立つ町々の寺院の建物や方尖塔や金字塔、石造りの巨人像なども見える。バアセアスは大麥や亞麻や稗や、蔓の長い葫蘆など生ひ繁つた畝の中に翔け下りた。

其の時人々は都の大門の外で勞働して居た。よく見ると彼等は各自分の領地を守つて互に他人の者を侵さない。水の流れを利用して、種々、穀類の種を蒔き、足で踏み着けては水を灌げて居る有様がエチプト人の天性として、なか／＼賢く働いて居る。けれど、バアセアスを見ると、彼等は仕事をやめて其の周圍に集まつて来て、叫んでいふには、

「若者よ。お前さんは何うした人ですか。其の持つて居る野羊の皮には何がくるんであるのです。屹度お前さんは神さまに違ひない。お前さまの膚は象牙色に白く、私等のは泥のやうに赤い。又お前さまの頭髮は黄金の糸のやうで、我等のは黒くて縮れて居る。屹度お前さまは神さまに違ひない。』
怒ういつて人々は、バアセアスを禮拜でもしような様子であつた。が、バアセアスは、

「私は神さまではない。只希臘の勇士だ。荒れ野の中でゴルゴンを殺し、其の首を携

えて持つて居る。私の仕事はまだすまない。今死にたくはないから何卒何か食物を呉れまいか。』

エチプト人はバアセアスに食物や菓實や葡萄酒やを與へた。が、バアセアスを他郷に歸さうとはしない。かれこれする内、ゴルゴンを殺した勇士が来たといふ噂が市内に傳はつて僧さんがバアセアスを迎へに来る。僧さんと一緒に若い女も来て、歌を歌ひ舞を舞ふ。或は片面鼓を鳴らしたり豎琴を弾いたりした。開れ計りか、エチプト人はバアセアスを御殿に連れて行つて其處の王さまに逢はせやうとしたが、バアセアスは开座な事が煩さくて仕方がない。それで、そつと其の暗色の帽子を冠つて何處ともなく姿を消して了つた。

エチプト人は何時までもバアセアスの歸るのを待つて居た。けれど、何時までも歸つて来ない。で、其の後エチプト人はバアセアスを勇士と仰ぎ尊んで、チエシスと云ふ所に其の像を建てた。この像は數百年の間、建つて居たがエチプト人はバアセアス

が一キユービットもある靴を穿いて時々表はれて來るとか、バアセアスの表はれた年は何時でも豊年で、ナイル河は水嵩が増して來るとか曰ひ傳へて居た。

バアセアスはエヂプトを去つて、紅海の濱傳ひに東方へ進み、アラビアの砂漠を避けて新たに路を北方に變へた。が、この度は暴風雨に防げらるゝ事もなく、至つて無事であつた。

バアセアスはイスチスを過ぎカシアス山を超え廣いセルボニアの沼地を渡り、顔の色の眞黒いエチオピア人の住んで居るパルスタインの濱傳ひに進んだ。

更に益深く進んで、故郷のアルゴスやラセデーモンや、デンペの谿に似た景色のいゝ山谷や丘陵を通つた。が、低い土地は全部、洪水に浸り、高い土地には盛んに火が燃え廣がり、小山の地震の神のポサイトンが怒つて、そのため鼎の湧くやうに動いて居た。

で、バアセアスは、内地に深く入つて行くのは、危険と思つたから、濱邊傳ひに海

の上の空を翔けること終日、空は煙が立て罩めて黒くなつて居た。それを又、一夜續けて行くと、空の色は焔火で紅色に染まつて居つた。

かうして、其の曙の頃、バアセアスは斷崖の聳え立つた方を眺めやると、黒い斷崖の裾の水縁に何か白い偶像のやうな者の立つてゐる姿が見えた。

「あれは屹度神さまの偶像に違ひない。側に行つて此の邊の野蠻人の崇拜んで居る偶像は那麽者か見てやらう。」

恚う思つて、バアセアスは偶像の近くに進み寄つた。と、其れは偶像ではなくて、肉もあり、血も通つて居る生きた處女であつた。房々した頭髮は微風に吹かれて流れ戦いて居る。バアセアスは更らに側近り寄つて見ると、波から立つ飛沫のかゝるたびに處女は身を縮めて震へ上つて居る。雙手は頭の上で廣げたまゝ吊り上げられ、黄銅の鎖で、巖に結び付けてある。頭は胸のあたりまで垂れ下り、眠つて居るのか、疲れて居るのか、それとも泣いて居るのか分らなかつた。が、折々空を仰見しては泣き乍ら

母親の名を咥んで居るやうである。バアセアスは暗色の帽子を被つて居るから、處女は其の側に來たことも氣附かないでゐた。

バアセアスは可哀さうに思ふ心と腹立たしい氣とで、胸の中は一杯になり、近寄つて熱ら其の處女を見ると、雙頬の色はバアセアスよりも少し黒いが、頭髮の色は青黒かつた。バアセアスの心では、

『自分は今日まで這麼な奇麗な處女を見たことがない。自分の故郷を捜し廻つても這麼な奇麗な處女は居まい。屹度此の處女はさる王さまの處女に違ひない。野蠻人は何故王さまの息女を這麼なに残酷に待遇かふのだらう。這麼な美しい處女が罪を犯したとも思はれない。此の處女に話をして見やう。』

暗色の帽子を取るとバアセアスの姿は煌々光つて處女の前に表はれた。處女は恐く思つたのであらう。聲を立て、叫びだし雙手は岩に結び付けられて動かないので、頭
の毛で顔をかくして了つた。

バアセアスは、

『奇麗な處女よ。私は少しも悪い事をするのではない。希臘人で野蠻人とは違ふ。おん身を此の岩に結び着けたとは何んと残酷な仕業だらう。併し今、私が解いて上げる』

憚ういつて、其の鎖を破壊して了はうとした。が余り丈夫なので破れない。其の時處女は聲を揚げて、

『妾に觸つてはいけません。妾の身は呪はれて海の神さまの犠牲に捧げられて居るのです。妾の縛を解したりすると貴郎は海の神さまに殺されて了います』。

『殺せるなら殺すがいい』。

憚うバアセアスは云ひ放つて腰に佩けた神さまの劔ヘルペを抜き放つて、亞麻でも切るやうに黄銅の鎖を切つて了つた。

「最う御身は私の者となつたのだ。海神が何と曰はうとも御身を彼に渡すわけには行かぬ。」

どパアセアスはいつた。けれど、處女は愈、母親の名を叫び立てるばかりであつた。「何故御身はお母さんと呼ぶのです。貴女を此處に捨てるやうな無慈悲なお母さんを。巢から落ちた鳥は取り上げた人の所領になる。道傍に落ちて居る珠玉は拾つて飾りにする人の所屬である。私は貴女を助けたのだから貴女を私の者にするのに不思議はない譯だ。パラス、アスイネの神さまが私を此處に遣つた譯は今漸つと分つて來た。開れば私の永い骨折りに報るて呉れるためであつた。」

パアセアスは處女の手を握つて問ふには、「貴女のやうな綺麗な處女を殺さうとする残忍な不正な海神は何處に居るのです。私は神さまから武器を戴いて居る。海神とやら私と力競べをして見るがいく。それはさうと貴女のお名前は何と云つて、何處這麼な處の岩に結び付けられて、這麼憂い

目に會つて居るのか聞かして下さい。」

ど、處女は泣く泣く語り出でた。

「妾はイオバ王セフィアスの息女で、母は美しい縮れ毛で名高いカツシオピアといつて、妾の名は兩親が、アントロミーダとつけて大變可愛がつて呉れて居ました。が不幸福にも妾は母の罪障の償ひのため海の神さまの犠牲に捧げられて此處に縛られて居ます。その譯は私の母が母族の女王ステルカチスよりも妾の方が余程奇麗だといつて何時か自慢したことがあります。アテルカチスは開れを怒つて、海繻を起したり、又、アテルガチスの兄弟の火の王さまは地震を起したりして國內を荒しました。その上、洪水が退くと其の後の泥土の裡から生れ出た怪物を使つて此の國の生物を悉く食ひ盡さして了ふのです。で、今アテルカチスは妾を餌にして、是れと云ふのです。……妾は是れまで決して生命ある者を殺したことはなく、一匹の魚でも陸の上にあるのを見ると、必ず海に投げ返してやるやうにして居ました。是れ

も畢竟、妾の國をばアテルカチスの怒るのが怖い故、魚類は食べないといふお法度になつて居るからであります。妾は這麼なにして罪障を犯した覚えはないのに、國内の僧さん等は妾を犠牲に捧げなければアテルカチスの怒りは解けぬといつて罪も報もない者を這麼にしました。』

パアセアスは此の言葉を聞くと哄然と笑つて、

『海の神さまとや、私は開れよりも最つと恐ろしい者と戦つて、今、其の歸途であるのだ。私は貴女の爲めになら神さまにでも叛いて見せます。況して海の神位何はごのこともない。』

此の時アントロミーダは顔をあげてパアセアスを見ると新しい希望が其の胸に湧き出て来た。パアセアスは一方の手でアントロミーダの髪を掻き一方の手では燦然光る劍を握つて立つて居たが、其の姿の雄々しく勇ましいこと。それに大變奇麗にも見えた。が、處女は愈泣き叫ぶのであつた。

『貴卿はまだお若い御身でありながら、何故お命を大切になさらないのです。此の世の中では死ぬる時や泣く場合はいやな程澤山あるではありませんか。妾の生命一つで、此の國の人々の生命を悉皆助かることなれば、今妾が此處で死ぬるのは名譽です。が、此の國の總ての人々よりも、もつと優れた貴卿のお身を妾風情の爲にお殺申してはすみませぬ。貴卿は一刻も早くお歸り下さいませ。妾は行く所まで行かねばすまぬ身であります。』

けれどパアセアスが叫ぶには、

『否、否、吾がお仕へ申すオリンプスの山の神々さまは、諸勇士の味方をして下さつて、勉め勵まして善い行をさせて下さる。私は此の神々さまのお助けで、恐ろしいゴルゴンの頭を討ち取ることができた。私がゴルゴンの頭を持つて、此の國を荒らす悪い物を殺すために来たのも神々さまのお導きに相違ない。が、このゴルゴンは見る者を石にして下す。で、私が此の手を貴女の軀から離したら直ぐ貴女は眼をか

くして下さい』。

七〇

が、アンドロミダはバアセアスのいふ言を信じないので、何の返事もしなかつた。驚てするとアンドロミダは不意に振り仰いで、沖の方を指して叫ぶには、『お日さまが昇がったら、約束通り怪物が来かけて居る。妾は最う殺されて了ふのです。さあ、貴郎は此處をお去きなさい。何うせ妾の軀は喰ひ殺されて形も姿もなくなつて了ひます。あゝ怖い』。

慄う云つてバアセアスを側から押し退けようとした。けれど、バアセアスは、

『ぢや、私は此處を退きませう。併し私が此處を退く前に只一事約束をして下さい。若し私があの怪物を殺したなら、貴女は私の妻になつて下さるといふこと、并して私は國王の後嗣だからアルゴスといふ景色のいゝ故郷の國に歸らねばならぬ。其の時、貴女も私と一諸に行くといふこと。さあ此の二事の約束をしで其の證據に接吻して下さい』。

で、アンドロミダは振り仰いで接吻した。

バアセアスは嬉しさに莞爾して、其の儘空高く翔け登つた。アンドロミダは何うなり行くことかと戦々しながら巖の上に踞つて居た。

見ると大きな黒船にも似た海の獸が岸に近う寄り沿ふて、徐々、小波を押し分けて来る。

時々浦や岬の所で立ち停つて、濱邊で布を洒して居る處女等の笑ひさゝめく聲に耳を傾けたり、又は砂丘の上で家畜が前足で土を爬いて居る所、或は子供の水遊をして居る様な姿を見て居つた。其の巨大な軀の兩脇には介殻やら海草やら群れて居て流蘇を着けたやう。朝日の光の射る中を水音立て、煌々身を光らせつゝ徐々と遊いで来る。廣い口から水を吸ひ込んで、どつと又瀉いで居た。

到頭アンドロミダの姿は海獸の目に入つた。と此のうら若い犠牲の處女の方に驚然に突き進んで来た。海獸が遊いで行く跡には白い沫が湧き、行く手には魚族が飛ぶ

七一

やうにして群れて逃げる。

パアセアアは空中から流星のやうに白波の湧き立つ中へ飛び下りた。开してアンドロミーダはパアセアスが合圖の叫び聲を聞いて、顔を覆ふた。暫時、四周は静かになつて物の響も聞えなかつた。

アンドロミーダが怖やしながら、顔をあげて見た時には、最うパアセアスは身を躍らして側に駆けて来て居た。海の獣の姿は見えずに其處には長い黒い岩が出来、岩の周囲には小波が穏やかに立つて居た。

パアセアスは奇麗なアンドロミーダの軀を擁えて断崖の頂に开けて返つた。恰かも隼が鳩を捕へたやう。その勝ち誇つた姿は又なく勇ましいものであつた。

處女の成り行きやいかにと、氣遣つて、断崖の上から海獣のせんやうを見て居たエチオピアの人々は此の光景を見て、一方ならず喜んだ。戀て一人の使者がカソシオピアの許に駆け着けた。其處では王さま夫婦は粗い衣服を着て、御殿の一番奥まつた部

室で泣き泣き息女の最後の報知を待つて居た。が、息女の無事に助かつたといふ報知を聞いて、其の喜びは勿論のこと、市内の人々も王さま夫婦の後にぞろぞろと隨いて歌を歌ふ、舞を舞ふ、鏡鉢を叩く、堅琴を弾くといふ賑をして、此の不思議な出来事を見物に行くのであつた。アンドロミーダは死者の蘇生つたも同じやう、再び父母の許に歸ることが出来たのである。

その時セフェウスは、

「勇ましい希臘人よ。貴郎は此の土地に留まつて、私の養子になつて下さい。私の持つた領地の半分は差し上げますから」。

といふと、パアセアスは、

「貴卿の婿にはなりません。が、貴卿の領地を預けて頂いて此處に留る譯には行かないのです。私には希臘といふ楽しい故郷の土地があり、其處には私の母が私の歸國を待つて居ます」。

此の時セフェウスはいつた。

「息女を此の儘すぐと連れて歸つて下さるのは許して下さい。此の息女は私どもには死んだ子の生き返つたも同じです。貴郎も私どもも此の土地に一年住むで居て下さつて開れからお國にお歸りなさい。」

パアセアスは其の言葉に従つて王さまの御殿に行つた。其處で人々に命じて、石と木とを持つて來させ、三つの祭壇を築きあげた。一個はアイスネの神のため、一個はヘルメスの爲め、そして残る一個はチユウスの神のため、開れには、牝牛や小羊の贄を捧げた。

と、其處に居る人の内に、

「此の人は信心深い人だよ。」

といふ者があつた。僧さんのいふには、

「開れが皆馬鹿されて居るので、海の女神さまは前よりも、尙、荒々しい害をなさ

るだらう。」

けれど人々はゴルゴンの頭が恐いから聲高くはやう談話さなかつた。そして其の人たちは皆、御殿にあがつて見ると其處の大廣間では、セフェウスの兄弟のフキニウスが子を失くした熊のやう、猛り狂ふて、子息や婢僕や、其の他武器を待つた多くの人々と一緒に立つて居た。

フキニウスはセフェウスを呼びかけて、

「お前は何處の馬の骨とも分らない外國人に息女をやるといふことがあるか。アンドロミダは、私の息子と許婚になつて居る。今あの息女は無事に歸つて來た。だからあれは私の息子の妻にするが當然ぢやないか。」

といつたら、パアセアスは笑つて答へた。

「若し貴方が息子さんのお嫁にはしかつたのなら自分で其の處女を救つてやればよかつた。けれど、まだ、嘗て貴方の息子さんは人の生命を救助けたことのない花婿さ

んでせう。貴方の子息さんは此の處女の死ぬる所を見殺しにして居た。で、此の息女は貴方の子息さんの爲めには最う死んだも同然です。私は此の處女の生命を助けてやつた。で、此の處女の生命は私の者で、他に誰れの持ち物でもない。貴方は恩義も義理も知らない人です。私は貴方の住んで居る國の難義を救つてやつたではないか。又、貴方の子息さんや貴方の娘さんや貴方の生命を助けて上げたも同然ぢや。開れを貴方は恩を仇で報わやうとする。此處をお退きなさい。でないと御身の爲めになりませぬぞ。

けれど、武器を持つた人々は、皆劍の空を脱いで猛獸のやうにバアセアスに突きかかつて來た。

で、バアセアスはゴルゴンを包んだ野羊の皮の覆面を取つた。

『是れは私の妻を食はんとした怪獸を除いたゴルゴンの頭ぢや。あの處女に害をする者は誰れでも用捨はあるまい』。

バアセアスが恚う云ひ放つた時にはフネニウスと武器を持つた人々は最う動けなくなつて、其處に立つたまゝ、軀は固くなつて居た。バアセアスが再びゴルゴンの頭を野羊の皮に包んだ時には彼等の軀は最う石となつて居た。

で、バアセアスは人々に貫拵を持つて來させて、其の石を除けさせたが、その後、其の石は何うなつたか分らない。

此處で、バアセアスとアンドロミダとの結婚の式が擧げられた。それは七日の間續いた盛大な式であつた。世の中に此の夫婦ほど幸福な夫婦も少なかつた。

式が始まつて八日目の夜であつた。バアセアスは夢を見たのである。開ればバアセアスが七年前セライフォス島で見た其の儘のバラス、アスイネが自分の側に立つて居る夢であつた。

バラス、アスイネはバアセアスの名を呼んだ。

『バアセアスよ、お前は男々しい仕事をしたから御覽なさい。よい報ゐを得たではな

いか。此れで、神さまの御心の正しきこと、神さまは自分で自分の事を爲す者を助け玉ふ者だといふ事が分つたらう。では、今、此處で、神さまのみ劔ヘルベと、靴と暗色の帽子とはお返しなさい。これを妾はそれ／＼所持主に返してやるから。併しゴルゴンの頭だけは今暫時お前が持つて居るがいつ。此れは希臘に歸つても入用があるから。それが済んだらセライフオスの島にある妾の殿室に返納なさい。その首級は妾の楯の上にかけて置いて、永久に巨人や怪物や神さまと人間との仇をする者を威す料にしよう。开れから此の國には最う水難と火災とはないやうにして置いた。で、此の國には再び洪水に困むこともなければ、地震の來る事もない。併し人人には此の國にチユウスの神と私とに祭壇を作つて、尊敬させなさい。』

で、バアセアスは、アスイネの神に神の劔と帽子を捧げやうとして起き上つたと思ふと眠が醒めて、其の夢は消えたのである。

併し是れは跡形なき夢ではなかつた。ゴルゴンの頭の包んである野羊の皮は其處に

残つて居たけれど、神の劔と帽子と靴とは最う其處に見えなかつた。

バアセアスは心に恐くなつて來た。夜が明け放れると、人々の處に行つて此の夢の話をして、チユウスの神とアスイネの神との爲めに祭壇を立てさせた。で、其の國には地震大火の起る事なくて、非常に平和であり、播種することも出来、家を立てる事もできた。それで暫くは國も榮えたがバアセアスが故郷へ歸り去つた後、其の國の人はチユウスの神のことも、アスイネの神のことも忘れて了つて、復たも女士アテルガチスや魚族を拜むやうになつた。

で、チユウスは此の愚昧な人民に對して怒りをなし、エヂプトから他國人を連れて來て戦をさせて、全然、此の國の人々を殺させて了ひ、數百年の間エヂプトから連れて來た人々を其の國の市々に住はせた。

(その五) 故郷の錦

憊うして一年は経つた。バアセアスはチイルからフォエニケ人を雇うて来て、杉の樹を切り出し、自分で立派な帆前船一隻を作り、帆柱は朱で彩色り、船体は瀝青で塗つた。其の船に乗つてバアセアスとアンドロミーダとは、總てのお婚禮道具を積んで希臘に行くことゝなつたのである。別離を惜んで人々の歎き悲むことは一通りではなかつた。併し、バアセアスの雄々しい勇ましい行爲は、永く此の土地の人々の記憶に残つて居て、アンドロミーダの岩は爾後一千年以上の長い年月バレストアインのジョバの地にあつた。

花郎と新嫁との乗つた船は港を出て西に向つて進んだ。クレテの島をすぎ水青いエーシアや、景色のいゝ希臘の諸島を経て、終に懐かしい故郷のセライノス島に歸着いた。

バアセアスは濱邊に帆前船は残して置いて上陸して家に歸つた。歸つて母親とヂクチスとを抱き上げて、暫時は互に嬉し涙に呉れて一言もいへなかつた。丁度七年振の母子の出會であつた。

バアセアスは野羊の皮に包んだゴルゴンの頭を抱えてポリデクテス王の部室に行つた。

王は廣間の中で役人や農夫等を集めて一緒に卓子を圍んで酒宴をして居た。魚の身や獸の肉又は葡萄酒など卓子の上に御馳走が並んで居た。豎琴を弾く者、酒杯を鳴らす者、それはく盛んな騒ぎであつた。

バアセアスは其の部室の入口に立つて、王さまの名を呼びかけた。が、お客さんの中には誰れ一人バアセアスを見知つて居る者はなかつた。長い年月の旅で、バアセアスの姿は全然變つて了つて居たのである。國を出るときにはまだほんの小さい子供であつたのが今歸つて来て見れば最う立派な勇士の姿である。雙眼の輝きは鶯のやう、

八二
盤の威めしいことは虎かと思はれて、其の勝ち傲る有様は猛き犬の勢込んで居るやうであつた。

併しポリデクテス王はバアセアスを忘れては居なかつた。开して王の頑固な邪な心は更に意地悪くなり、輕蔑んだ調子で叫ぶには、

「あゝ捨て兒か。お前は容易約束をしたが、さう容易く成し遂げることができたか。『神さまのお助けを身に負ふた者はちかつた約束は違へない。神さまを輕蔑にする者はその報を身に受ける。そら、ゴルゴンの頭を見ろ。』」

といつて、バアセアスは野羊の皮を除けてゴルゴンの首を高くさしあげた。

ゴルゴンの物凄顔を見ると、ポリデクテス王と其の客來の顔の色は青褪めて了ひ其の腰掛けた席から少しも動かなくなり、そのまゝ冷めたい鼠色の石となつた。

此の時バアセアスは軀を廻へして灣内に繋いで來た帆前船に下りて行つた。其處の國はチキクナスに與へ、自分は花嫁と母とを連れて生れ故郷へと船出して其處を去つた。

九
ポリデクテス王と其の客來とは酒杯の乗つた卓子を取り巻いて坐つて居たのだが、到頭其の家の梁は朽ちて、王と客との頭の上に落ちかゝり、土壁は壞れて人々の背中にたはれ、卓子も破れて了ひ、酒杯は人々の脚下に破れて飛び散つた。唯だポリデクテス王と客來とは、今でも尙、小山の側に鼠色の石となり、輪形を作つて坐つて居る。

併し、バアセアスは西の方アルゴス指して船を漕いで、漸く其の町に着いた。着いて見ると祖父さんのアクリシアスは逐電して其處に居ないことを聞いた。それは兄のブレタスがアクリシアスに戦争をし懸て、河を渡つてタイリンスから攻め寄せ來てアルゴスを掠つて了つた。で、アクリシアスはバラスギといふ人民の住んで居る荒れ果てたラリツサの地に逃げたのである。

此の時バアセアスはアルキープス人を集めて、自ら名乗りあげ、是れまでして來た

勇ましい数々の物語をした。人々はパアセアスの勇ましい行為に感じて、王様と仰いだ。そして、一緒にアルゴスを攻め取りプレタスを殺戮しシクロプスを打ち従へてタイリンスにて作つたと同じ城をアルゴスの周囲に構へた。人民ごもはチユウスの神から豪い王様を貰つたといつて、アルゴスの谷では歡喜の聲が高かつた。が、パアセアスはお祖父さんのことばかり氣にかゝつて詮術がない。

「屹度、彼れは、私の血肉の者に違ひない。お祖父さんは、私が名譽を擡つて歸つたと聞いたら、私を愛して下さるだらう。私は行つてお祖父さんを捜して連れ歸り一緒に力を戮せて此の國を平和に治めやう。」

パアセアスは臣下のフォニクア人を引き連れて船出して、ヒトレアやサニウムを廻り、マラトンやアヂック海岸を経て、エウリプスを過ぎ長いエウホニアン海を渡り、終に猛々しいベラスキ人の住むで居るラリツサの町に着いた。

パアセアスは町に着いた時、其處の人民等は野邊で酒宴を開いて、いろ／＼の競技をして居た。

其の酒宴は其の町の王トクタメテスが、アクリシアスが昔強い國の王様であつたといふので敬ひの心を表はして開いたのであつた。

パアセアスは自分の名乗りもしないで、其の競技の仲間に加はつた。若し自分が此の競技で勝つて、褒美でも貰へばお祖父さんの心は打ち解けて来るであらうと思つてである。

パアセアスは競技の仕度として、兜を抜き、胸甲を取り、其の他總て軀に着けた装束を脱して、ラリツサの町の若者ごもの間に立ち交ざると、皆其の様子に驚き怖れていふ。

「一体、此の外國人は何者だらう。丸で勝ち傲つた猛犬のやうに立つて居る。屹度、オリンプスの山から來た神さまの子息の勇士に違ひない。」

さて、競技が初まるご人々は愈驚いた。パアセアスは競走でも驅け飛びても相撲

でも投槍でも、技術にかけては何人よりも一番勝れて居て、名譽ある優勝冠は四個ながらバアセアスが取つて了つた。バアセアスは、

「最う一個第五の冠が残つて居る。私はそれも取つて了ひたい。そして、個々もお祖父さんのお膝の上に置いて見たい。」

と憊ういつて、タメネス王の側に坐つて居るアクリシアス王の方を見た。見るとアクリシアスの白い髭は膝の上まで垂れ下つて、波をうち、手には王笏を持つて居る。アクリシアスがバアセアスの方を見た時には、其の眼からは涙の露の雫がこぼれ落ちた。

「屹度あの老人は昔、王さまであつた人に違ひない。が、あの老人は恥かしからぬ孫を持つて居る。」

と憊う自分で云つて、さて投環を取り上げて、他の人々よりも五尋ばかり遠くに投げた。と、人々は叫んだ。

「勇ましい外国人よ。尙、遠くまで投げて見せて下され。貴方はどの伎倆の人は未だ

此の國では見たことがない。」

バアセアスは腕に力一杯を籠めて環を投げた。

折りしも一陣の風が海の方から吹いて来て投げた其の投環を吹きやり、他の人々より遙か先きの方に持つて行つた。が、其の環は悪しくも、アクリシアスの脚に落ちかかつて、アクリシアスは其處に仆れて氣絶して了つた。

バアセアスは驚きの聲をあげて、アクリシアスの側に驅けて行つたが、其の倒れた軀を抱き起した時には、アクリシアスは呼息されて居た。

最う老年の故で軀は悉皆、弱り切つて居たものだから。

バアセアスは其の場に崩をれて長いこと、お祖父さんの死んだことを泣き悲んで居た。やがて、バアセアスは起き上つて、人々を聲高に呼び集めて、いふには、

「神さまは虚言を仰せられぬ者である。神さまの御命令には叛いてはならぬ。私は此

の死んだ人の孫で、ゴルゴンを殺して名高くなつたバアセアスである。』

バアセアスは、昔から、自分がお祖父さんを殺すことがあるといふ豫言があつたことや、自分の此れまでの閱歴を細かに物語つた。

人々はアクリシアスの不慮の死を悼み歎いて立派な火葬をしてやつた。バアセアスは其の町の神の祠に行つて、誤つて祖父を殺した罪の掃ひ淨めをした。

其の後バアセアスはアルゴスの地に歸つてアンドロミーダと共に其の國を治めた。四人の子息と三人の息女とを生んで年をとつて死んだ。

昔の人の云ひ傳へによるとバアセアス夫婦の屍はバラス、アイスネの神がセフ井サスとカツシオピアと一緒に上天に取りあげたといふことである。今日でも星月夜には此等の人々が空で光つて居るのを見ることが出来る。セフキウスは頭に三冠を頂きカツシオピアは象嵌のしてある椅子に腰をかけ、星の光のちらつく縮れ毛に波うたせバアセアスはゴルゴンの頭を持ち奇麗なアンドロミーダはバアセアスの側で白い腕を

廣げて坐つて居る。其の姿は海の怪物の犠牲にあげられて、岩に縛り附けられて居た時の通りであつた。此等の人々は天にあつて夜な夜な、煌々光り輝いて、波に漂ふ水夫に燈火の光となり、豈はオリンプスの山の静かな峯で、神々さまと同じ一つの卓子を圍んで祭られて居るといふことである。

中の卷 勇士アルゴナウツの卷

(その壹) 山上の健兒

これはアルゴナウツといふ勇ましい武士が、金毛の羊の毛皮を取りに行つた名高い物語で先づ金毛の羊の毛皮とは何か、是れから物語らう。むかし昔、希臘人が金毛の羊の毛皮といつたのは、今日サアカツス海岸と稱して居る、昔はコルピスといつた處の戦神の住んで居る森の中の檜に釘着けにしてあつた者で、雲の神とミニユアン王

アサマスとの間に産れた子供フェリックスとヘルレとを背負ふてユウキシースの海を渡つたと云ひ傳へられて居る不幸福な小羊の毛皮である。ある年ミニエアの地に饑饉があつた。其の時アサマスの後妻のイノといふ無慈悲な女が、織母のあさましい心を出して、自分のお腹から産れた子をアサマスの後嗣に立て、後にはニエアイの王さまにしたいといふ慾心から、織子のフェリキシウスとヘルレとを邪魔者に思つて殺して了はうと計畫んで居たので、此の度の饑饉は何か神さまのお氣に召さぬことがあつてそれで神さまがお怒りになつたのだから、到底、祭壇でも作つてフェリキシウスとヘルレとを犠牲にでもあげなければ此の饑饉は直らないといつた。で此の二人の子供は可哀さうにも、祭壇の前に連れて行かれたのである。と、其處では僧正が小刀を手にして待ち構へて居た。が、その時空の雲の裡から金毛の小羊が来て二人の子供を背負ふて、何處とも知らず姿を掻き消すやうにかくして了つたのである。で、恐かなアサマス王は氣が狂つて来て、子供と一人殺して了ふと、残る一人をイノ

が小脇に掻い込んで、斷崖の上から海に躍り込んだ。處が其の軀は海豚の姿と變り、子供を胸に抱き緊めて、いつも溜め息を吐きながら海の上を逍遙ふて居た。併し其の國の人々はアサマス王は、自分の子供を殺した、王様として置くべき人でないといふので、其の國から放逐した。爾後は、王さまは昨日に變る哀れな身の上となり、かなた此方を難義して流浪して廻つたが、終にある時、デルファイといふ土地の聖者の許に來た。聖者はアサマスの姿を見ていふには、

「御身は犯した罪障の報で、彼方是方を逍遙ひ歩かねばならぬ。が末にはある野邊で、獸に食物を貰ふ時がある。」

それからアサマス王は幾日となく物うい月日を送つてさまよひ廻つた。が、其の間にはお腹の空いて來ることもある。食物はなく只心悲しい許りであつた。かれこれする内ある日野邊で大狼の群に出會つた。丁度、其の時大狼の群は一匹の羊を捕へて其の肉を割いて居た。が、アサマスの姿を見ると其のまゝ羊を捨て、逃げ失せて了つ

た。で、アサマス王は大狼の残して行つた羊を腹一杯食ふことができた。そして心に前に會つた聖者の言葉の相違なかつたことを悟つて驚いた。爾後、アサマス王は最うさすらひ廻ることもなく、其處に町を作つて再び王さまとなつた。

が、かの雲の中から下りて來た羊は陸を越え海を涉つて行つた。二人の子供は背負ふたまゝで終に遙か離れたトラシアン、チエルフキスに着いて其處でヘッルレは海の中に落ち込んだ。

それが原因で、其處の狭い海峡をヘレスポイントといひ、今日まで其の名稱で傳はつて居る。

金毛の羊はフェリキシウスを伴れて、現今黒海といふ當時ヘレン人はユーキシースと稱して居つた海を超え西北の方を指して翔けた。希臘人のいふ所では其の金毛の羊は終に峻しいサアシスの海岸、コルチスの地に留まつたといふことである。此の地でフェリキシウスはアイエテス王の息女チャルチロープといふ姫さんを娶つて妻とし

た。开してアイエテス王は金毛の羊の毛皮を剝いで軍の神アレスの領分の森にある棺に釘着けにして了つた。

其の後間もなくして、フェリキシウスは死んで葬られた。が其の魂は暫らくも安らかでない。开れば故郷なる景色のいゝ希臘の山々を離れた土地に葬られたからである。でフェリキシウスは夢幻の間にもミニユアイの諸勇士の所に行き其の枕邊に立つては恚ういふのであつた。

『誰か來て私の魂を自由にして呉れ。父さんや親類の者の居る楽しいミニユアイの國に歸りたい。』

すると、諸勇士は、

『何うしたら貴卿の魂は自由になるのです。』
と尋ねた。

『开ればお前方が海を超えてコルチスまで來て金毛の羊の毛皮を持って歸つて呉れ、』

ばいゝのだ。すると私の魂は金毛の羊の毛皮と一緒に返つて、父さんや、親類の人々と同じ所に休まれる。』

憊うフェリキシユウスは答へた。

這麼にしてフェリキシユウスの魂は幾度となく故郷に歸つて来て、勇士の人々を音づけたのである。諸勇士は眠が醒めては互に顔を見交して、

『誰れか海を渡つて、コルチスに行つて、金毛の羊の毛皮を持って歸つて呉れる者はないか。』

と云ひ合つたが、さて誰れ一人として開れをやつて來やうといふ程大膽な者はない。思ふに、まだ其の時は時節が至らなかつたのであらう。

フェリキシユウスの同胞に海邊のイオコスといふ國の王さまエーソンといふのがあつた。エーソン王は伯父さんのアサマス王がポエオチアを支配して居た時分、富み榮えたミニユアンといふ國の諸勇士を支配して居つた。が、エーソン王はアサマス王と

同じく不幸福な人であつた。エーソン王にはフェリアスといふ異腹の兄弟があつた。人の説によると、此のフェリアスといふのは、森に住む仙女が産んだ子供だといふことである。其の産れた時のことに就ては不思議な哀れな話が残つて居る。未だ生れ立てのフェリアスは山に捨て兒にされた。开れを野生の牝馬が來て蹄で蹴返した。丁度其の時一人の牧羊者が通りかゝつて、その蹴られて黒斑の入つた孩兒を拾ひ上げて家に連れ歸り名をばペリアスと付けた。このペリアスは成長するにつけて猛々しい氣儘者となり澤山の聞くも恐ろしい行爲をした。が、終には異腹の兄弟のエーソンも、同胞のネリウスも放逐して、自分で其の國を奪ひ取り、海岸のミニユアの地で諸勇士を支配して居た。

エーソンはペリウスに國を逐はれて、悲くも幼い子供を抱えて、住み馴れた町を出た。エーソンの考へるには、

『此の兒は山にでも隠して置かねばなるまい。でないと、私の後嗣といふので必ず』

殺されて了ふに違ひない』。

エーソンは海を越え、谷を渡り、葡萄酒やオリブの森を通り抜けて、アナウロス河の急湍を渡り白雪を頂いたペリオン山の方へ行つた。

沼地や岩山や沙阜を越え、山を深く分け上ると、子供は最う疲れて了つて足を痛めた。エーソンは子供を雙手で抱きかゝえて、断崖の裾にある大きい寂しい洞穴の口まで来た。

断崖の上には梢を飾る白雪の花が大陽の光に照り附けられて、融け滴る水雫や塊のまゝ崩れ落ちる響が聞える。が、裾なる洞穴の口の周囲は美しい花や草が庭に植えたかのやうに順序正しう生えて居る。草や花や大陽の光と断崖から落つる雪融けの水の急湍の散滴を承けて樂しげに生々成長して居る。時折は洞穴の裡から、音楽の響が起り堅琴と合せた歌聲が聞えた。

其の時、エーソンは擁えた子供を下に置いていふには、

「應せずに入つて行くが、途中で會つた者は誰でも橋はないから其の人の膝の上を手を置いて憐れいふのです。神さまと人間との父チユウスの神さまの御命令で今日から貴方の宅にお邪魔に上つたので」。

エーソンの子供は流石に勇士の子息であつた。聊かも臆した色もなく洞穴の中に入つた。が、入つて行く中では不思議な歌聲が聞えるので驚いて足を留めた。見ると其處には、花の色香匂はしく咲いた樹の大枝の上には熊の皮を敷いて一人の人が坐つて歌を歌つて居るのであつた。其の人はチエイロンといつて古の怪物で、大變に賢い者であつた。姿を見ると腰から上が人と同じで下は馬のやう、白い頭の毛が廣い肩に垂れかゝり、白い鬚は廣い蒼色した胸のあたりまで覆ひかぶさつてゐて、眼は賢く柔和に額は山壁のやうである。

チエイロンは黄金作りの堅琴を持ち黄金作りの鍵を弾じて居た。弾く糸の音と合せては歌ひつゝ、其の眼は燦然輝いて居て、洞穴の裡は隅々まで明るかつた。

其の歌を聞くと、時の初めや、空や星、海とか空気とか、又は恐ろしい不思議な土地の成立のことを歌つて居る。又山にあるいろいろの寶だの鑛山の事、火金の脈、或はいろいろの藥草の効徳だの、豫言者のこと、それに後世に表はれて來べき者について、かれやこれやと歌つて居た。

また、健康、音楽、男性、勇敢、相撲、その他、勇士の人々が好きこのむ總ての競技だの戦争だの包圍だの勇ましい戦死だの、事を歌ふて居るかと思ふと又、次には平和とか豊年とか國の平等正義とかいふことを歌ひ初むる。开して歌つて居る時には其の青年は目を睜つて聞き惚れて了つて親の吩咐は忘れて居た。

さて老ひたるチエイロンは歌ひ終ると柔和な聲で青年を呼びかけた。

青年は身を戦慄させながら、驅けて來て其の手をチエイロンの膝の上に置かうとしたが、其の時チエイロンは莞爾して、

「お父さんと呼んでおいでよ。私はお前も知つて居るし、お前の吩咐られたことも知

つて居る。又私はお前等親子が町を出る前に遠い谷の中に居たことも知つて居る。

エーソンは悲しそうな顔をして入つて來た。チエイロンは、

「何故お前さんは自分で此處へは來なかつた。エオリツトのエーソンよ、

と聞かれてエーソンは、

「子供一人でやつたら、貴方さまが不慮と思つて下さるかと思ひまして、それに子供も勇士の子息たるに恥しからぬ行爲がやれるか何うかと思ひまして、が今私の一生のお願ひです。何卒時節の來るまで此の子を貴方さまのお膝下で諸勇士の子息さんの方々と一緒に訓へて下さつて、父の家の再び持ち立てるやうにして頂きたいのです。」

と答へた。是れを聞いてチエイロンは微笑ながら、エーソンの息子の青年を索きよせて手を房々した縮れ毛の上に置いていふには、

「お前は俺の脚の蹄が恐くはないか。开れども、今日から俺の弟子とならうと思ふか。

『どうだ。お前、よい兒だよ。』
青年は、

『貴君と同じ歌が歌へるやうになるのなら、私も开座踏が愆しう御座りますよ。』
といふと、チエイロンは笑つていふには、

『日の暮れるまで此處に坐つて待つて居るが、いゝ。黄昏には他の子供も歸つて來やう。开等の人々とお前も一緒に稽古をして、勉強し豪傑等の頭に立つて王さまとなるやうに豪くならねばならぬ。』

愆ういつて今度はエーソンの方を振り返つて、チエイロンは、

『用心をして無事にお歸りなさい。用心といふのは暴風雨の前には腰をかゝめて逆はない事です。此の子が再びアナウロス河を越す時にはお前さんの名譽、ユーロス家の名譽を身に負ふて行くだらう。』

といふのであつた。エーソンは子供に別るゝ事の悲しさに泣いて名殘を惜んで去つた。が、子息は少しも泣かない。洞穴のことやセントウル的事や、夕暮に歸つて來るといつた朋輩のことばかり考へて居て、胸は嬉しさ樂しさに一杯になつて居たのである。

チエイロンは青年に堅琴の弾き方を教へてやつた。聽て太陽は西の山の方に低く沈んで斷崖の後背に落ちた。其の時、チエイロンの住む戸の外では、友よび交はす若者の聲が聞えて來た。

聽てエーニアス、ヘラクルス、ペルース、その他、數多い名うての勇士の子息等が入つて來た。すると、チエイロンは小躍りして喜ぶ、子供等が、

『出て御覽なさい。チエイロン先生、さあ、競技を見て居て下さい。』

と叫んだ時にはチエイロンの脚の踏の土踏む音が洞穴に響をかへすほどであつた。
一人、

『私は鹿をやつつけました。』

といふと他の人は、

「私は巖の裡で野猫を一匹捕へました。」

といふ。するとヘライルスは又野羊を一匹、角を掴んで引つ張つて来た。見るとヘラクルスは大山のやうな男であつた。ケニユウスは雙の腕に一匹宛の熊の子を連れて来た。熊の子は爪で引掻いたり歯で噛みついたりするのであつたがケニユウスは笑つて居つた。ケニユウスの軀には齒も牙も立たなかつたのである。

チエイロンは各獲物を調べて、それ／＼褒美を與へた。

唯一人、群を離れて黙つた切り、子供にはませ過ぎたアスクレフネスといふのが、草や花を胸のあたりに雙手一杯かゝえて腰には班點のある蛇を着けて歩んで来た。此の男は雙眼を下に垂れ勝ちで、チエイロンの前にも、蛇が古い皮を脱けて目の前で再び若くなつて行くさまや谷を經、林に出て藥草を取つて病者を治療してやつたとなど話すのであつた。チエイロンは莞爾して、

「アイヌネの神やアポロの神は人には皆々何か資賜を授けて各自に技能を持たせてあるが此の子には外の人の殺す所を治療してやるといふ尊い伎倆を授け玉ふた。

歸つて来た青年どもは、薪を取つて来て割り、それに火を點けると熾々と燃え上つて眞晝のやうに明るかつた。それから鹿の皮を剥いて肉を取りそれを火にかけて焙肉を作る者もある。其の肉の焼ける間に皆、雪融けの水の急湍に下りて、垢や汗を洗ひ落した。

皆、黎明に食へた切り、其の時まで一口の食物も口にしなかつた。水浴が済むと皆焼肉を腹の皮の破れるまで食べ、澄み切つた清い水を飲んで咽を濡ほした。此の時は皆、若い者ばかりであるので、酒は用ゐなかつた。食事が終ると残り者は下げ、皆毛皮だの木の葉だのを、焼火の周圍に敷いて坐を作り、順番に歌つたり踊つたりした。開れも厭いて来て、今度は、皆洞穴の口の草生ひ茂つた所で拳闘や競争や相撲やその他いろ／＼の遊戯をした。その笑ひ動搖めく聲で、断崖の岩は崩れ落つるかと思は

れた。

一〇四

チエイロンが琴を取り上げると青年は手を結び合ひチエイロンが琴を弾すると、其の調子に合はせて、結び合つた人々は輪形になり、くるくると踊り廻るのであつた。愆うして、皆手と手と取り交して、日輪が落ちて、陸も海も、何處の隅々まで暗くなつて来るまで舞踏をやつて居た。が、間い谷間は此の青年等の白い四肢や黄金色の頭の髪（ひかり）の光で輝き渡つて居つた。

エーソンの連れて来た青年は、此の若者どもと一緒に踊つて誠に楽しさうであつた。が其の夜は桂の木やマートルやマルシヨラムなど香氣の高い木の葉やチムの花の上でよく睡り、夜が明るくと再び起き出でた。顔は雪融けの水で洗ひ、それから、諸勇士の子息等と一緒に稽古をして、アイクロス（アイクロス）の事や、父親のことや、昨日までの生活のことは悉皆忘れて了つて居つた。が、其の青年は日増しに力は強くなり、膽は大きくなる。踊らして、ペリオン山の奇麗な草原や、山の清い空氣の中に伶俐に成長した。

相撲拳闘狩獵彈琴などの業も知つて来た。馬に乗る稽古もした。これはチエイロンが、いつも、青年を背中に乗せてやつて馬乗りの道を覚えさせたのである。又、總ての草の功德も知り創傷を治療す方法も心得て来た。チエイロンは此の青年のことをジャンンのお医者さんと呼んで居た。が、其の名は今でも傳はつて居る。

(その貳) 無情の伯父

十年が経つた。ジャンンも最上立派な一人前の男になり、一緒に居た友達の中にも他の國に行つて了つた者もあり、尙、彼れと一緒に残り留まつて居る者もあつた。アスクレピウスは自分の不思議な治療法を人に施して、それを生活にするためペロポネサスに行つた。人の説によると此の男は死んだ者を蘇生らせることが出来たといふことである。ヘラクルスはテーベに行つて名高い事業をした。ペリウスは仙女を妻とした。エーネアスは、トロイの地に歸つた。ある日のこと、何氣なくジャンンは山の頂

點に立つて北から南、東から西と四方の景色を眺めて居たが、其の傍にはチエイロンが、最う時節の到來たことを知つて居たので、ジャンソンを見詰めて立つて居た。

ジャンソンは眸を舉げて、曾つてラビタイが馬匹を飼つて居たといふテッサリアの平原や、ホイへの湖や北に流れて、ベニス河テンペ河の兩河に注ぎ込む流れを見えた。北にはマグネシアの海岸を繞る山壁や、オリンプスの山、オッサヤペリオン山が見える。東には渺茫とした青海も見える。南の方には白壁作りの町家や農家が見え、深く入り込んだ灣に沿ふた土地、其處がバカサイ灣で、ヘーモニアといふ豊饒な低地やアイオコスといふ土地である。

その時ジャンソンは溜息を吐いた。

「諸勇士が私に汝は奇麗な土地の王さまの後嗣だといつたことのあるのは眞實か知らん。」

と慫う聞くとチエイロンは、

「ジャンソンよ。お前はあの奇麗な土地の王さまの後嗣となつたら、お前は仕合せだね。」

といつた。ジャンソンは、

「私はあの國を私の領地にして丁はうと思ひます。」

と答へた。

「彼の國は豪い男が持つて居る國で、久しい間其の男が支配して居る。お前は鬼のやうなペリアスよりも強いと思つて居るのかい。」

と、チエイロンがきくと、ジャンソンは、

「ちや、一つあの男と力競べをして見ませう。」

といふのであつた。チエイロンは溜息を吐いて、

「お前があの海に沿ふたアイオコスの國の王さまになるには随分といろく／＼な危険な事、不仕合、又は外國で難義に出逢はねばならぬ。」

〇 といふと、ジャンソンは、

108

『開れば尙ほの事面白い。何も男の力試めしです』

といつたが、チエイロンは矢張溜め息を吐き吐きいふには、

『兎も羽毛が出来れば巢立をせねばならぬ。お前も海に向側のアイオコスに行かうと思ふかい。では、お前が此處を經つて行く前に、私に二個の約束を固めて置きなさい』

ジャンソンはチエイロンに約束をしようといふた。チエイロンは、

『お前は何人に會つても荒々しい言葉を使つてはいけない。お前はお前の使ふべき正しい言葉を用ゐなさい』

といはれて、ジャンソンは何故這麼約束をせよといふのかと、不思議に思つた。が平生からセンタウルの豫言者であること、又何事でも起つて來ない先きに其の事がちやんと分つて居る人であることを思つて居るから、其の云ふなりに約束し、さて、勇ま

しく自分の一生の修業に出かけたのである。

ジャンソンはアルフツスの森をぬけ、イムの丘阜を横断つて、下に降りると其處は葡萄や柘榴、オリブの生えた谷であつた。そのオリブの間を流るゝアナウロス河は折柄、夏のことゝて水嵩が増して、一面に泡立ち沸騰りつゝ荒れて居る。

見るとアナウロス河の岸邊には一人の皺の多い顔色の悪い老婆さんが坐つて居る。頭は麻痺れていも居るのか。胸のあたりまで垂れ下つてふら／＼と動き、手も亦麻痺れて居るのか頽然と膝のあたりまで垂れ下つて居る。が、老婆さんはジャンソンを見て泣くやうな聲を出して、

『お前さん、妾を此の向側まで渡して下さらぬか』

といつた。ジャンソンは大膽な性急な男であつた故、さう云はれとる最う直ぐに水中に飛び込んで向側に渡しやらうかと思つたのである。が、さて其の時再考へた。此の爲色がつた流れは山の上から落ちて來る雪融けの水で、中に一筋の白銀色の水

脈が立つて居る。湍は疾く水音は高く凄い。底の方には騎兵の馳けるやうな音、又は狭い水道を車輪が軋り行くやうな低い重い響がして、それがジャンソンの立つて居る巖を振ひ動かして居るやうであつた。が、其の時、お婆さんは愈々激しい泣き聲を立てて、

『奇麗な青年よ。妾は老年つて軀は弱つて居る。ヒーラの神さまのためだ。妾を向側に渡してお呉れな』。

で、ジャンソンは輕蔑んだ口調で、お婆さんを罵つてやらうかと思つたが、恰かも其の時セイロンの訓誡が胸に浮んで來た。で、

『オリンプスの山に在す女神ヒーラさまに誓つて、屹度二人で溺れさへしなかつたら貴女さまを向側に渡して差し上げます』。

といふと、お婆さんは身を齟然とジャンソンの背中に乗つた。そのす敏いこと野羊の動作のやうであつた。で、ジャンソンは心に不思議に思つて躊躇ふて居ながらも、水の

中に入つた。其の一足目には水は膝頭まで届いた。

二足目には腰の邊まで濡れて來て、幾個となき石が脚の周圍を轉げ廻り、ジャンソンの脚は亦石に這つて行くのであつた。で、ジャンソンは躊躇めきながら、喘ぎ喘ぎ歩んで居るとお婆さんが背中からいふには、

『馬鹿だね。妾の上衣の濡れて居るのが分らないのかい。お前は妾のやうな老年を意地目やうと思つて居るのぢやな』。

ジャンソンは腹の底では余程此のお婆さんを水の底に放り込んで了はうかと思つたがその度にチエイロンの訓誡が胸に浮んで來る。

『勘辨して下さい。お婆さん。何う確呼として居つても躡く者ですから』。

といふのであつた。終に渡り切つて、お婆さんを岸の上に卸ろした。這度洪水の急湍を渡つた處を見るとジャンソンは余つ程力の強い男であつたに違ひない。

ジャンソンは岸に上つても、暫時は喘ぎ喘ぎ寝て居た。が、俄然に起き上つて、旅を

續けて進み行かうとした。が、その時、

『せめて、一言位の禮は云ひさうな者だ』

と思つたので、一瞥お婆さんの方を見やると遣は何處、今の今までお婆さんであつた其の婦人の姿は悉皆變つて了つて、目醒むるばかり綺麗な背の高い婦人となつて居た。夏の海と輝く衣服を着けて、飾りの玉はみ空の星かと思擬ふばかり、顔には、夕日に映つた黄金色の雲にも似た面被がかつて居る。面被の奥からは大きい柔和な、威あつて光の強い目がジャンソンを見卸ろして居る。

ジャンソンは跪いて雙腕の間に其の顔をかくして了つた。その時、婦人は、

『妾はオリンプスの山に住む女神で、チユウスの神の妻ヒーラである。お前の骨折については報ひは必ずする。願言があれば妾を尋ねて來るといふ。神の言葉には偽りはない』。

ジャンソンは畏ろしくなつて來た。が、暫時すると心は再び爽快になつた。で、ジャンソンはチエイロンを祝福ていふには、

『センタツルは豫言者に違ひない。私に荒々しい言葉を人に使つてはいけなないと誠めて呉れた。あの時分、最う今日の事が分つておつたのだ』。

ジャンソンはイコマスを目指して行つた。が、此の時、洪水の中を渡つて居る間に草蛙の片方なくしたことに気がついた。

ジャンソンはイコマスの市街に行くとその市街の人々はジャンソンが大變身の丈の高い綺麗な男である所から見物に出て來た。その時老人どもは互に何か囁き合つて居たがその中から一人の老人がジャンソンを呼び留めた。

『青年よ。御身は何人にて此の町には如何なる用あつて來られしや』

『やあ、お老人、私はジャンソンといつて、ペリオン山から來た者で、用といふのは此の町の王さまペリアスに逢ひたくて來たのです。何うか、ペリアス王の宮殿を教へ

ど、ジャンンがいふと其の老人は吃驚して顔の色は青褪めて了つた。

『青年よ。御身は此の町を草鞋片方穿いて通る大膽さ、まだ神さまのお托宣を知らないと見える』。

『私は外の國から来た者で开歴な事は聊かも存じませぬ。私の片方の草鞋が何うかしたといふので御座りませうか。私は無理矢理に洪水を渡つて来たので、片方の草鞋はその時アナウロス河の中で失くして了ひました』。

老人は仲間の者を振り返つて見た。すると溜息を吐く者もあれば、微笑む者もある。終に其の老人は口を切つた。

『私はおん身が知らないで身を滅ぼすのが氣毒でならぬから、眞實のことを話して上げやう。實はデルファイで神さまのお托宣があつた。开れば、草鞋片方穿いた男がペリオン山から来て、此の國を奪ひ掠つて了ふといふことであつた。だから、御身

が王さまの御殿に行くときには氣をつけてお出でなさい。此の國の王さまは猛々しい、そして賢い王さまだから』。

此れを聞くとジャンンは勇み立てる駒のやう、大聲を立て、笑つた。

『お老人、貴方のためにも、私のためにも、それは誠に幸福なお托宣だ。私は其の爲め此の町に来たのぢや』。

ジャンンはペリアス王の御殿をさして行つた。が、人々は其の行爲の大膽なのに吃驚して居た。

ジャンンは御殿の入口に立つて、

『さあ、出て来い。出る。勇ましいペリアス王よ。男らしく尋常に勝負をして此の國を渡せ』。

ペリアス王は吃驚して、

『大膽なる青年よ。御身は何人なるか』。

と叫んだ。

『吾はエーソンの子息ジャンンといふ者ぞ。此の國の王家の後嗣なり』

ペリアス王は雙手をあげて、雙眼を睜つて驚いたが、懸て泣き出した。开れば、實は泣く眞似をしたのであつた。开して珍らしい懐かしいジャンンの來たことを喜び、最う決してジャンンは自分の側から離さないこと、愆うして久々に出會つたのも皆慈悲深い上帝のお紹介であるといつて嬉しがつて、さていふには、

『私には三人の息女がある切りで、後嗣となる男の兒は一人もない。是れからお前が私の婿になつて私の歿後は此の國の世話がして貰ひたい。三人の息女の内氣に入つたのを妻にしてくれ。お前は此の國を憐れと思ふかも知られぬ。又此の國の王になる者は實に不惑だ。が、まあ奥で、一つ酒宴でもしやう』

愆ういつてペリアス王はジャンンを内に引入れてさもさも懐しさうに、話をしかけては丁寧な御馳走をした。その爲めジャンンの怒りは解けて了つた位である。夕飯が

すむと、三人の息女は廣間に入つて來た。ジャンンは三人の中で、何れを妻にしたものかど見て居たが、終にジャンンはペリアス王にいふには、

『伯父さん、貴方は仕うして开歴に心配相な顔付をしてゐらつしやるのです。此の國は積らない、這麼國の王になるのは不惑だと仰しやつた其の譯は？』

此の時ペリアスは幾度も幾度も氣分の悪るさうな顔付をして溜息を吐き吐き、丁度人が、何か畏怖い話をせねばならぬときそれを云ひ出すのか畏怖くて畏怖くてたまらないといつたやうな風であつた。

『七年の長の年月、私は一たびも枕を高うして落ち着いて寢たことはない。併し最う金毛の羊の毛皮を持つて歸つて來るまでは私の後をつげ覗ふ者はなからう』

愆ういつてペリアス王はジャンンにフェリキシウスと金毛の羊の毛皮の話の一伍一什をして聞かせ、又、フェリキシウスの幽霊が出て夜となく晝となくペリアス王の名を呼んで苦めるといふ跡形もない欺りを話した。三人の息女も來て、同じ話をし

た。それはペリアスがそのやうに吩咐だからであつた。そして三人の息女は歎き悲んでいふには、

『あゝ、誰れか、妾の伯父さんのフエリキシユスさまの靈の休息まるやう。開して伯父さんの靈のため安らかな夢も結ばない妾どもも安らかなるやう金毛の羊の毛皮を持つて歸つて呉れる者はなからうか』

ジャンンは暫時、沈黙つた切り、悲しげな面持で坐つて居た。それは兼ねて金毛の羊の毛皮の事には話しに幾度も聞いて居たが、到底人間業では持つて歸ることのない者と思つてゐたのである。

ペリアス王は沈黙つたまゝジャンンの顔を見て居たが、今度は話頭を變へて、最う自分の後嗣はジャンンに決めたやうなことで、又國のことには心をかけて貰ひたいといふやうなことをいつて、愈ジャンンの心に媚びるのであつた。で、年はまだ若いし、考慮もまだませてゐない青年のことゝて、ジャンンは終に、

『伯父さんは世間でいふほど悪い人ではないやうだ。開にしても何故私の父を放ひ逐して了つたのだらう』

といふ考が起つて来て詮術がないのであつた。で、ジャンンは心を定めてペリアス王に尋ねた。

『人の評判では、貴方は大變血がお好きださうですが、私は貴方を大變親切なやさしい方と思ひます。私は貴方に親切にして頂いて嬉しいので御座りますが、でも貴方は何故私の父を放ひ逐したのです』

ペリアス王は一たびは微笑んだが、更に又、溜息を吐いて、

『それは世間によくある濡れ衣といふ者です。お前の父さんは其の時は年老の加減で軀が弱つて居た。で父さんか此の國を私に任せて下さつたのです。お前は明日父さんにお目にかゝつて聞いて見るがいゝ。私のいふことに違があるか』

ジャンンは父に會へると聞いたので、嬉しくて心は躍り上るばかりであつた。で、

110
ジャンソンは父のなくなつて居ることも忘れて了つて、ペリアスの言葉を何もかも信用して了つた。

ペリアスは又云ふた。

「最う一言、お前に助言して貰ひたいことがある。お前は未だ年こそ若けれ、思慮はなかくにませて居る。實は私の隣國に一人の男がある。私には此の男が一番畏怖いので、今では私の方が強いから先方が私の方に従つては居る者若し私どもの中に長く留まつて居ると終には私を滅ぼすやうなことをするに違ひない。ジャンソンよ、それには何かよき工夫はあるまいか。私は其の害を除きたいのぢやが。」
ジャンソンは半笑を含んで、

「若し私が貴方であつたら、其の男を今お話し金の羊毛の羊の毛皮を取りにやらうと思ひます。若し、其の男が開れに「たび、出かけて行かう者なら二度と歸つて來ることはないのだから」。

之れを聞くとペリアスの雙唇には苦々しげの笑が浮んで來て、目には氣味の悪い喜悅の色が輝いて來た。ジャンソンはそれを見て吃驚して此の老人には油斷をしてならぬことや、片方の草鞋の話、さては神さまの御托宣のことなど思ひ出して、自分は最うペリアス王の畏の中にかゝつて居るのだと氣が注いだ。

が、ペリアス王は唯一言、物靜かに答へた。

「我が子よ。では私は其の男を使にやりませう。」

其の時ジャンソンは駭然として起ち上つて叫ぶには、

「お前の云ふ其の男とは俺のことぢやろう。俺が片方の草鞋を穿いて來たから。慥ういつて怒りの余り、拳を固めて振りあげた。

ペリアス王も猛り立つた狼のやうにジャンソンに立ち向つた。

が、纏てペリアス王は調子をかへて物やさしく、

「何をお前は開廢に怒るのです。今の話はお前の云ひ出したことで、私の云つたこと

ぢやないではないか。何も私に開廢に怒ることはあるまい。若しお前が私の云つた男を私の養子にして此の國を譲れといつても否とは云はない。若し又私がお前の云ふ通り、其の男を神さまのやうな高い名譽を得るため遠い外國にやつたとして御覽なさい。何うでせう。私は是れまであの男にもお前にも一度も害を加へたことはな。只一ツ私の知つて居ることは、あの男は豪い男で、名譽を愛し一たび云つたことを破るのを好まない男だから、其の男に行けと云へば屹度行くに違ひない。ジャンンは自分でうま〜毘にかつて了つたことは知つて居る。が、チエイロンと結んだ約束がある。

「若しセンタウルが豫言者であつて、此の事にもその云つたことが當つて居るなら何うだらう。私が金毛の羊の毛皮を得るといつたことも大抵は分つて來た」と恚う考へて一段聲の調子を張り上げて、

「狡猾い。伯父さんは甘い事をいつた。私は名譽を愛するといつた約束は決して破らない。私は行つて金毛の羊の毛皮を取つて來やう。其の代り唯一言の約束をしてよく開れを守つて下さい。チユウスの神に誓つて、私の留守の間は私の父を大事にして居て下さい。そして私が金毛の羊の毛皮を持つて歸つて來た曉には私に此の國を渡して下さい」。

恚ういつたのでペリアス王は總身の憎惡の情も忘れて了ひ、ジャンンを頼すりせんばかりに愛した。そしていふには、

「その約束は必ず守る。あの金毛の羊の毛皮を持つて來るほどの男に此の國を譲るのは名譽だ」。

ペリアスとジャンンとの二人は固い約束の言葉を取り交して、そして二人は奥の部屋に入つて寝た。

が、ジャンンは今の大事な約束や、何うしたら、お金もなく伴侶もなく只一人で開廢な事を仕遂げることが出來やうかと考へると寝ても寝着かれない。で長い間、寢床

の上で身搖さばかりして兎や角と思ひ煩ふて居た。すると折々、フェリキシユウスが細い微かな糸のやうな言葉で自分を呼んで居る。それが遠い海の向側から響いて来るやうで。

『私を故郷に連れて歸つてお呉れよ』。

と聞えるかと思へば、又、時としてヒーラの神の二個の目が表はれて、

『用事のある時は尋ねておいでなさい。神の言葉に欺りはない』。

と云ふ聲が聞えて来る。やがて、其の夜も明け放れて翌日にはジャンンはペリアス王のところに行つて、

『ヒーラの神に捧ぐる犠牲を下さい』。

といふた。ジャンンが犠牲を供へて、祭壇の前に立つと、ヒーラの神は智慧を授けて下さつた。で、ジャンンは再びペリアス王のところへ歸つていふには、

『若し貴君のお心に欺偽がないのなら、私に二人の使者を貸して下さい。一人は昔時、

私と共にセントウルの子であつたミニユアイの諸王かたに遣はすため、一つには船やいろ／＼の準備をして事間に合ふやうにしたいから』。

ペリアス王はジャンンの智慧賢く思慮深いことを褒めて使者を立てる準備を取り急いだ。此の時ペリアス王の心には、

『ミニユアイの諸王もジャンンと一語にやれば矢張再び歸つて来ることはない。そうなるも自分がミニユアイ全國の君となり希臘では一番大きな國の王となれる』。

と恚ういふ考が浮んだのである。

(その参) 金羊毛狩

かれ是れするうち使者はミニユアイの國に行つて諸勇士に布令知らしていふには、

『金毛の羊の毛皮を取りに行かうといふ者はないか』。

ヒーラの神は諸國の王さま方を勵ましたので、方々の谷々から諸勇士が黄ろいバガ

サイの砂地に出て来た。第一番馳けの勇士はヘラクルス。身には獅子の皮衣を着け、手には棒を持って居つた。次いで馳け着けた面々はヘラクルスの若黨で、弓と矢とを持つたハイラス。舵手の名人チフ井ス、人間界で第一の美男子ブウテス、白鳥の子息の魔法使であるカストルとポリリュウセスといふ雙生兒、臂力の非常に強い男で、曾つてセントウルが殺さうとして殺せなかつたので松の樹を倒しかけたが、矢張、開れども死ななかつたチーニユース等である。又かなたに來た人々は北風の子息の翼のあるチエテスとカライス、白銀脚の仙女を花妻として居たアヒレスの父ペエリニウス。トロイの平原で戦争をしたアイアンテス、テラモン家の父とオイリュウテス家の父、禽獸の言語を知つて居る賢いモブサス、フキーバスから豫言をする舌を貰つたマドモン、星の文を読み、空の上の事を知つて居るアンケーオス。その他、勇士の數は分らないほどであつた。頭には染め色の馬の毛の着いた黄金白銀の兜を頂き、鎖幄衣の下には刺繍のあるリネンの短衣、戰場で膝を防ぐ磨錫の脛當て、肩には固い犬の皮

で作つた澤山の褶ある楯を負ひ、鉛の飾釦を着けた帯には鍛い上げた鐵の劍を佩け、右手には重い槍を二本持つて居る。かうして、諸勇士は皆イオルオコスに來た。處が、市街の者はみな、諸勇士の歡迎に集まつて來て、それは、^{さかん}壯大な光景であつた。或る人は、

『希臘人が此の國を征服してから以來、這歴に諸勇士の澤山に集まつたことはない』
といつたが、婦人等は溜息を吐き吐き、

『あゝ、皆、生命を捨てに出かけるのか』

と。謔いて居た。諸勇士はペリオン山の松の樹を切り倒して削り、そして其の木でアルゴスは帆前船を作ること教へた。是れが世界で大きい船の出來た初めて、船には五十丁の櫂を通し、諸勇士が皆なで開れを一丁宛受け持つて漕ぐことにした。船体は黒色の瀝青で塗り、船首は朱で彩色をした。船の名はアルゴスに因んでアルゴと稱した。諸勇士は毎日船作りのために勞働して居た。夜はペリアス王の御馳走になつ

て、御殿の玄関の前廊下に寝るのであつた。

一一八

ジャンンは北の方なるスレースといふ地に行つて、樂人の長オルフォイスを音づれた。スレースはジャンンが會時ロトープといふ岩下の洞穴で、シコンといふ野蠻人と一緒に住んで居た處である。ジャンンはオルフォイスにいふには、

「昔時の友なるオルフォイスよ。私は今度ミニユアイの國の諸勇士と一緒に金毛の羊の毛皮を取りに行くことになつたのだ。で、君も一緒に行つて不思議な力ある君の豎琴と君の歌聲とで、人も怪物も魔力にかけては呉れまいか」。

オルフォイスは溜息を吐いて、

「私はチエイロンの洞穴に住んで居た以來、随分といろく働きますれば遠方に辛い旅もして来た。私の母なる女神が授けて呉れた聲も最う駄目になつた。私は無茶に歌つたり働いたりした。無益な死者の所にも行つた。私の花嫁のエウクチースを取り戻すためハーテスの諸王方を魔術にかけたこともある。といふのは、私は愛らし

い花嫁を娶つたが其の日に又た失くして了つた。で、私は狂人のやうになつて埃及やリビアの砂原や諸所方々の島々を捜し廻つて、其の折、琴と歌とで、人も獸も魔術にかけてやろうとしたが駄目であつて、花嫁の姿は見附からない。が、母は私を救ふて此處へ連れ歸つてくれた。で私は今此の洞穴で只一人住つて居る。それなのに今度、復た世界の端の遠い霧の深い闇い土地に入つて東の方の海の波うつ端まで行かねばならぬとは何たる悲しいことだらう。併し是れも運命なら詮術がない。友の依頼には叛かれぬ」。

慍ういつてオルフォイスは溜め息を吐き、堅琴を持つてスタイモンに出かけた。ジャンンは先きに立つて南西の方にハリヤクモンの河岸傳ひに登り行きピントスの山嘴を超えテュウスの神の在すド、ナといふ町に着いた。此處には樫の木のある森がある。開れば昔時、黒鳩の住んで居た處で、今はテュウスの比丘尼の住み家となり、周圍の人民に神さまの托宣を布令だす所となつて居た。其の森で、オルフォイスはジャンン

に森の大木を切り落させ、それをヒーラの神とチエウスの神に供へる賛とした。二人は其の樫の木の枝を持つてイオルコスに来て、船の船嘴に釘着けにした。

これで、船は出来あがつたのである。諸勇士は一緒に集まつて濱邊で進水式をした。が、其の船は聊重すぎて、人を悉く乗せると動かなくなり、船底は砂地深く入つて了つた。此の時、諸勇士は皆顔を赤くして、互に顔見交して居る許り。只ジャンダだけは沈黙つては居ないで、

「一つ賛の枝に聞いて見やう。多分うまく助けてくれるだらう。」

此の時、樫の大枝から聲が聞えた。ジャンソンはその言葉を聞きオルフォオキスに堅琴を弾じさせ、同時に諸勇士は松の幹の轉子を持つて船の周圍に立たせた。

オルフォオキスは堅琴を取り上げ不思議な歌を歌ひ初めた。

「あな樂し。波の表に船浮べ、波より波に移り行く。風は網貝をば吹き揺りて、樂しき調子奏つなり。楫とく漕げば光ある。水は泡立ち浮ぶかな。」

あな樂し。大海わたり西東、さすらひ行けばまだ知らぬ、町や不思議の陸も見つ、荷積む寶物と永久に、滅えぬ名譽を身に負ひて、家路にこそは歸るなれ。」

アルゴ一丸は此の歌を聞いて沖に出たくなつて来て、到頭、船首から船尾まで軽くなり、轉子の上に乗つて、逞ましい馬のやうに浮き上つて来た。それで諸勇士は松の木で船を押し出した。船は遂に水音高く海に出た。

諸勇士は船に食物と飲料とを充分に積み込んだ。それから、錨を甲板の上に引き揚げて、銘々自分の楫を取りオルフォオキスの堅琴に調子を合せて船を進め灣を横断つて南の方へ漕ぎ出した。此の時、數多くの人々が斷崖の上に立ち並んで、此の壯大な船出を見送り、婦人等は別離を惜んで泣き悲み、男子等は前途を祝つて盛んに萬歳を叫ぶのであつた。

(その四) 魔女メデア

船は峻工つた。船長にはジャンンがなつた。オルフオイスは木を堆積んで、祭壇を作り、猛犬を屠つてヒーラの神の犠牲に供へた。开して其處に諸勇士を招き集めて丸く輪を作らせ、その猛犬を一劔づゝ刺させた。此の時諸勇士の出で立ち、頭にオリブの冠冕を被ぶつて居た。ジャンンは猛犬の血や酒や海の鹽水を黄金の杯になみく注いで諸勇士に嘗めさせた。

諸勇士は順々に杯を飲み廻して、さて、神さまの前で、畏怖ろしい誓を立てた。それは忠實にジャンンを助けて金毛の羊の毛皮を取りに行くといふこと、中途で逡巡したり、命令を聞かなかつたりする者、又は誓に叛く者は神さまの罰を受けてもよいといふこと等であつた。

その誓がすむとジャンンは堆積み上げた木に火をかけ、猛犬の屍を焼き、東方を

さして船を出した。其の處をアフエタイといふて今から最う三千年以上も前のことである。

船出してから後の諸勇士はセピアスの岬を左手に見て、シリアスといふ島を過ぎ、北の方ペリオン山を廻り、長いマグネシアの海岸を走つた。右手には渺茫とした海、左手には聳え立つペリオン山、群雲は木深き松の森にかゝり、夏ながら雪の冠をかぶつて居る。諸勇士は懐かしい昔時住んだ山を見てはいろく其の時分の樂しかつたこと、少年時代の遊戯のいろく、断崖下の洞窟で稽古をした時のことなどを考へて、古思ふ心かどいめがたかつた。終にペリアスはいつた。

「諸君、此處に上陸して、懐しい山に最う一度登つて見やう。吾等の今度の旅行は生命かけの仕事をしに行くのである。生命ある内に再び此のペリオン山を見られやうも計られぬ。で、チエイロン先生のところに行つて、お暇請をして來やう。それに私の子供が彼處に一人置いてある。で、最う一度それにも會ひたい。到底これが今

生の別離になることであらうから。私の子供は名高い者にはなるが、短命で死ぬる。」

一三四

舵手チフキスは船をペリオン山の巖下の水涯に着けて上陸し、セントウルの巖洞へと出かけた。

行き着いた其處は白雪のかゝつた断崖下の霧罩めた暗い部室、軀の大きいセントウルが巖壁の上に大きな手足を打ち寛ろげて寝て居る。側には鋼鐵も身に透らぬアヒルスといふ子供が哀れな調子で上手に豎琴を弾いて居た。その琴を聞いてチエイロンは口邊に微笑を含んで居た。

諸勇士の來たのを見て、チエイロンは横たへた驢を起して、大變に喜んで、まあよく来て呉れたと一人一人に接吻して、さて後酒宴を開いた。小豚の肉や美味しい酒が出て、接待の役はアヒルスが務めた。黄金の杯が一巡廻り終り、次いで晚餐も終ると諸勇士は手を拍つて喜び興じた。オルフォイスは歌を希望まれて、『何うして私のやうな未熟の者が先生の前で歌はれませう』。

と謙遜して辭した。ではチエイロンにと希望むとアヒルスは豎琴を持つて來る。さして不思議な歌が初まつた。その歌には、チエイロンの兄弟どもが酒を飲んで狂氣染みた馬鹿を盡して其の揚げ句、終に其の身を滅ぼしたとことや、其の兄弟どもは諸勇士と戦ふて拳固で撃り合ひ、噛み合ひ又は酒を飲み散らしたとこと、痛く怒つては松の木の幹を引き割いたり、大きな岩を頭がし落したりしたこと、又戦争の騒ぎで山が鳴つたり地が荒れたりしたこと、最終にラビタイが兄弟どもをデッサリーの平原にあつた邸内から寂しいピンタスの谿間に透ひ放つたこと等であつた。其の歌は軍勢の勇氣を鼓舞するものであつたので、人々は心から褒めそやした。此の時オルフォイスも亦琴を提り上げて歌ひ初めた。その聲は巖窟の内から起つて巖の上に響き、樹々の梢の間にをくいつて、樅や松の木の花つた谿間に傳はつた。歌聲の響きに樹々は梢を垂れて聞き灰白色の巖は鳴りひびき、森の獸は近寄て來て耳を傾け、百鳥は巢を離れて舞ふのであつた。チエイロンは手拍手を取り蹄で地面を踏んでは足拍子を取つて居た。皆、

オルフォイスの不思議な歌の魔力に動かされたのである。

ペリアスは、自分の子供を抱きあげては接吻して泣いた。が、彼是して再び諸勇士は船に歸つた。チエイロンも船に来て名残を惜んで一人一人に接吻し、行く手の旅の無事で大名譽を得て歸るやうにといつた。諸勇士もチエイロンに別れて行くにつけても惜まるゝ名残の涙がこぼれて、雄々しい心も張り裂けるばかり、親切な賢いチエイロンを染み染みなつかしく思つた。チエイロンは断崖に戻つて、諸勇士の恙なく歸つて来るやうにと神に禱を捧げた。諸勇士は亦、沖の方から海に聳ゆる断崖を振り返ると、チエイロンがその巨大な雙手を翳して白髪を風になぶらせて立つて居る姿が見える。諸勇士は何時まで何時まで、其の方を見て居たが、終にチエイロンの姿も見えなくなつて了つた。で、最う再びチエイロンに會ふことはできないと思ふと限りなく悲しくなつて來るのであつた。

諸勇士は長い船旅を續けて、オリンプスの山や、アリスの樹の生えた灣、サモロー

スといふ島、レムノス、ヘレスポント、アヒトスなどいふ所を辿つてマルモラに出た。此處で、諸勇士はシチカスといふ者に逢つた。此の男は其の土地の主領で、父が矢張りチエイロンの弟子であつた所から、諸勇士を非常に歓迎して、御馳走をしたり、食糧や酒、時計に毛氈など諸勇士の使ふ者を船に荷積んでやつた。

ところが、ある一夜、ヘラクルスは誤つてシチカス王を殺して了つた。諸勇士は船に歸つて、チフキスの命令の下に皆櫂を取りあげて、錨を抜いで船を沖に出さうとした。が、チフキスの命令を下して居る時に一陣の旋風が來て、アルゴ―丸はくるくると廻り、錨綱も一緒に船に捲き附いて離れない。で、チフキスは櫂を下に置いて叫ぶには、

「これは神さまの爲される業ぢや」

此の時ジャンンは進み出て、大枝に相談した。と、大枝の答には、

「此れは、お前が慈悲深いシチカス王を殺したからで、シチカス王の靈魂の安まるや

うにしなければ、到底船は動かない。

ジャンンは悲しくなつた。此の事を船の人々に打ちあけて話した。で、諸勇士は再び船を上がつて、シチカス王の屍を手厚く葬り、犠牲を供へ、オルフォイスは不思議な歌を歌つて、王の靈魂を休めた。で、慈悲深いシナカス王の靈魂は安まつて了ひ、諸勇士も無事に船を出すことができた。

ミシアの海の濱傳ひ、クレタカスの入口をすぎ、終にアルカンサスの長い山の背の玄武岩の高い壁とで取り巻かれた景色のいゝ灣に着いた。

此處で、諸勇士は船を砂原にあげて、陸に上り、休息した。此處に、ヘラクルスは野鹿狩りに行つて、美少年ハイラスを見失ひ、開れを捜し廻る間にアルゴール丸は纜を解いて船出した。開れでヘラクルスは到頭、此處に留まつて、アジアの土地の美しい水の流れは見ることもできなかった。

其處を出て後、諸勇士はある寂しい土地に到着した。其處には、アミックスといふ

巨人が支配して居て、チユウスの神の誼は守つて居なかつた。此のアミックス王といふのは其處に来る外國人には誰れにても、拳闘を挑かけて、負けた者は皆殺して了ふのであつた。其處を去つて諸勇士は尙ほ先遠く進み行きて、ポスフロラスに行き、終に猛々しいビレニアス王フキニユウスの住んで居る町に着いた。此處ではジャンンはチエテスとカレイスとに命じて上陸させた。ところで、此のチエテスとカレイスとは風の子であつたから、此處で諸勇士と袂を分つて空中に揚がり、行方も知らずなつて了つた。

が、アルゴナウツは、東をさして進み、現今の黒海、當時のユウキシースといふ渺茫した海の中へ出た。その頃、まだ希臘人のうちで、一人として、其の海を超えた者はなく、此處の、廣い海、峻しい巖や砂岸、または立ち籠めた霧や烈しい風を怖がつて居た。此の海に就ては不思議な話がある。開れば、此の海は北の方に廣がつて居て、陸地の端の静かなブリーツトの海や、常夜の國、冥途の國に續いて居るといふので、

勇ましい諸勇士も、その波荒い黒海に出て、眼路の限り寄る邊の岸もない、唯廣々とした海の光景を見た時には流石に氣味わるくなつて戰慄した。

オルフォイスは先づ言葉の糸口を切つて、諸勇士を訓誡めた。

『我々はあの沖に浮いたやうな岩の處に行くのである。私の母の歌神カリオーベがこのことは話してくれてあつた。』

聽て見る。灰白色の硝子の螺旋や、城廓のやうに燦然する青岩が表はれて来て、其處から冷たい風が吹いて来た。これが、諸勇士の心の底まで徹み通るほどで、皆戰慄して来た。その岩は漸く近くなるにつれて長く捲き立つ海波に揉まれて、くるく巡り、巡つた後は互に衝突ひ擦れ合つて、その響はみ空の外にとゞかどばかり。

岩と岩とは互に疊みかけ、重なり合ひ、潮は岩と岩との間を噴水のやうに躍り上る。それが又どつと捲いて流れて一面の白泡に捲け去り、岩の周圍を拂つて行つた。が、岩は頭を水の表面に表はして居て、點頭點頭動かして居る。風は蓬然とやうなりを立て

て鳴つて行く。

諸勇士は氣もそらうに、氣遣はしくて堪え切れなくなり、恐ろしさに權も捨て、了つた。併し、オルフォイスは舵手のチフキスを招んでいふには、

『あの岩の間を吾等は通らなければならぬのだから、さう恐懼しないで、遠く廣い所でも見て居つて、氣を大きく持つて居なければならぬ。ヒーラの神は我等を守つて居て下さるから。』

大膽な舵手のチフキスも沈黙つた切り堅く兩唇を結んで一言もいはない。折から、一羽の青莊が、帆柱高き空を岩の方へと翔けて行く。その態度は何處にか通ひ路のりや、と搜してでも居るやうである。チフキスは叫んだ。

『あの青莊こそヒーラの神が吾等に下さつた水先案内である。一つ此の伶俐な鳥の後に隨いて行つて見やう。』

諸勇士は眼を睜つて、態度いかにと見て居たが、青莊は終に岩と岩との間隙を見附

けて、其の間を矢のやうに飛び抜けた。

青莊が羽搔疾く疾く翔け抜けやうとした刹那、二個の青岩は撞着つた。が、青莊はたい尾毛から雙翼にかけて打たれた許り、其の岩も撞着つたと思ふと懸て復たはね返るのであつた。これを見たチフキスが諸勇士を鼓舞すと、諸勇士は皆、歡びの聲を擧げて楯も撓む許り、満身の力を雙手に籠めて、飄々、流れて、生命を嚙む冷たい青襖めた雙唇と動く二個の岩の間を無恙く矢庭に漕ぎ貫けた。

青岩の間を漕ぎ抜けて、諸勇士は疲れた雙手を尙ほも漕いで、亞細亞の海岸傳ひ、黒岬やシネースやサンキシースといふ處を通り、オルフ河に着き、其處の王さまで親切の評判あるオルフ王の處に行つた。此處で、イドモンとチフキスとは死んで了つた。イドモンは悪い病氣で死に、チフキスは猛き野猪に殺されたのである。諸勇士は二人のために一處に墓を作つて、墓標には一本の楯を立て、やつた。イタはその野猪を殺してチフキスの誓を復り、アンケーオスが、チフキスに代つて楯を持つことにした。

諸勇士はシノブやいろくの大川の河口を通り、野蠻人やアマゾンズの市街や、戦争好きの東洋の女の間を過ぎて着いた所は、夜通し鐵砧の音だの籠より立つ風音だの山谷の中から闇の中を火花のやうに輝く鍛冶の火だの聞えて居た。此處は戦争の神のアレスの臣の鍛冶工が夜通し刀を打つて居るカリベスの海岸である。

黎明に東の方を眺めると海と空との間に鋭い光が燦然と表はれて、雲漠の上に輝いた、白い山らしい者が見えて來た。此處が世界の端の高架察であつた。この山は群山の王で、東洋では百川萬流の父となつて居る。頂にはタイタンが束縛られて身を横にして居る。それを兀鷲が來て、腸を突衝いて居るといひ傳へられて居る。麓には木深い森があつて、コルチアの土地を取り巻いて居る。

それより諸勇士は船を漕ぎ進めること三日が間、一刻一刻と高架察の山は能く目の前近く表はれて來て、終に海の逆落しに流れ込むファシス河の濁流と、太陽の子息アエネテス王の家の十字架の着いた黄金の屋根の高く聳えて居るのが見えて來た。

此の時アンケーオスは、

一四四

『我等は到頭最後の目的地に着いた。彼處にアイエテス王の家の屋根も軍神の住む森も見えて来た。あの森の何處の處に金毛の羊の毛皮はあるのだらう。あれを捜し出して希臘に持つて歸るまでは、まだ、その位、難義をせねばならぬのだらう。』

ジャンソンは、心性の高尙な大膽な勇士であつたから、諸勇士を慰めていふには、

『私が一人でアイエテス王の許には行つて來やう。假令、太陽の子でも、やさしい言葉で説きついたら無理な事はいふまい。皆で出懸けて行つて、直ぐに攻めるよりか、そうした方がよからう。』

が、ミニユアイ人はジャンソン一人を遣つて後に残ることを欲しなかつた。で皆、大膽にも其の流れを溯つた。

アイエテス王は亦、一夜夢を見て心配でたまらなくなつた。夢は一點の燦然とした星が自分の息女の前掛けの中に落ち込んで、开れを娘のメデアは嬉しがつて、手に

握みあげ、河に持つて行つて投げ込んだ。すると渦巻き立つた水は其の星を捲き込んで、ユーキシースの海に流して行つたと見て、さて醒めたのであつた。

その時、アイエテス王は、恐怖しさに襟から跳ね起きて、女神や、その河の畔をさまよへる諸勇士と和睦をして來やうと思つて、馬車の用意を命じた。王はその黄金作りの馬車に駕り、奇麗な魔法使のメデアやフェリキシユウスの妻であつたカルシオープといふ二人の自分の息女と一緒に陪乗して、群臣や兵隊を連れて出かけた。

かくて、兼や葎の茂つて居る河の畔に車を驅つて見ると、岸を溯つて、諸勇士の乗つたアルゴ一丸は着けてあつた。が、その軍容の奇麗で、強さうなこと、神のみ軍かとはかり、霧こめた海の面を透かして見ると、武器は、中空高い太陽の光線の中から燦然と輝いてゐた。其處に數居る諸勇士の中でも、ジャンソンは一番徳の高い人で、ヒーラの女神は彼れを愛して、美と才と男らしい氣質を與へた。

互に相近づいた。岸の上の人と船の中の人と相見交した時、諸勇士は太陽のやうに

一四五

燦然と輝くアイエテス王に對しては心恐ろしくなつて來た。見ると、アイエテス王の上衣は黄金の糸の織物である。冠冕からは燄ときらめく光輝を放ち、手には金珠珍寶燦然として空の星と美しく飾つた王笏を持つて居る。威儀堂々として聲音も嚴めしう、『御身等は何者なるや、何の用ありて此のカタイアの岸には來れるぞ。此の地こそは我が領する地にて、此の地には戦争の強きコルチア人あるを知らざるや』。

諸勇士はアイエテス王の前に暫時は沈黙つたまう、口を開く者もなかつた。が、強いヒーラの神はジャンソンの心を勵ました。で、ジャンソンは立ち上つて聲も高からに叫ぶには、

『吾等は海賊にもあらねば野蠻人にもあらず。此の地に來りしは勁掠や剽温をし又は奴隸を取る爲めではない。吾が伯父の、ボサイトンの子息、ミニユアイ國の王ペリアスより金毛の羊の毛皮を取りに遣はされたものである。是なる諸勇士には一人として名なき者はなく、中には神様の子息もあれば遠くの國まで名の響いた勇士もある。吾等とて決して戦争を恐れる者ではない。が、戦争などをせずとも、貴方のお客様となる方が雙方の爲めによからうと思ふ』。

此の時アイエテス王の憤怒は旋風の卷き立てるやうであつて、雙眼は燄のやうに燃え立つた。が、アイエテス王は其の憤怒を心の内に嚙み込んで和なく、

『御身等はコルチア人と戦争をして、金毛の羊の毛皮を取らうとするには澤山な人の生命を損はねばならぬ。が眞實に、金毛の羊の毛皮を取らうと思つてゐるのか。が、私が御身等に害を加へやうとすれば、船はお前等の屍で一抔になるだらう。が、併し御身等は私の云ふ通りにして、御身等の中から一番豪い人を一人撰り出して、私の命令に従はせるがよい。さすれば、其の褒美に金毛の羊の毛皮を其の男に遣はさう』。

恚ういつてアイエテス王は隨身を隨へて車を後に返して市に歸つた。諸勇士は船にあつて悲みに沈んで了つた。

が、フェリキシユウスの寡婦カルシオーブは諸勇士と同じミニユアイ人であつた夫君の事、その若い時分の總ての樂しかつた事など思ひ浮べて泣き悲みながら町へ行つた。妹のメデアアにいふには、

『何うしても諸勇士を死なせなければならぬだらうか。何故お父さんは妾の良人の魂の休まるやう金毛の羊の毛皮を渡して呉れないのだらう。』

メデアアは諸勇士、就中、ジャンンを大變に愛して居つた。で、

『お父さんは頑固で恐い人ですもの、誰れか金毛の羊の毛皮を取つて来る者はできな
いかしら』。

といつたが、カルシオーブは、

『此處に来て居る諸勇士は我等のやうな人間とは違ふから、此の人々のして出来ない
事はあるまい』。

といつた。メデアアも亦、ジャンンのこと、其の容貌の勇ましいことなどを考へて、

『若し此等の人々の中に誰れか大膽不敵の人があるなら、金毛の羊の毛皮を取る方法
は教へてやるに』。
といつた。

カルシオーブとメデアアとはフェリキシユウスの子息アルガスを連れて黄昏の薄暗
に迷れて河畔に行つた。アルガスは繁き兼葑を分けて河床に入り緊いだ船に来て見る
と、諸勇士は眠つて居つた。ジャンンは其の時、岸を警戒して居つて深い思慮に沈みな
がら、槍を杖に凭りかゝつて居つた。此の時小さいアルガスはジャンンの處に来てい
ふには、

『私はフェリキシユウスの子息で、貴方とは従兄弟に當る者であります。母のカルシ
オーブが金毛の羊の毛皮のことがお話ししたいといつてお待ち申して居ります。』
ジャンンは大膽にもその子供と一緒に行くこと其處に二人の高貴かい婦人が居た。カ
ルシオーブはジャンンを見て泣き出していふには、

『あゝお前さんは妾の子息の従兄弟だね。お前さんは此處に長く居ると殺されるから早く故郷に歸つて下さい。』

『なに、今、國に歸つて行くのは誠に詰らないのです。懐かしい伯母さん、折角、此處まで、いろいろ波風の苦みを忍んで來たのに、今此の儘で歸つては詰りませぬ。』と憊うジャンソンは答へた。二人の婦人は矢張どうか早く故郷に歸つてくれと頼むのであつた。がジャンソンは、

『最う開れば言つて被下るな、到底歸れませぬ。』

といつた。メデアアは、

『が併し、お前さんは、金毛の羊の毛皮をどうして取るのです。まあ、第一に焔火の呼吸を吐く黒鐵の脚の犬を二匹手馴れなければいけぬ。開して、其の犬と一緒に太陽のくれない内、アレスの野を四エーカーばかり耕して開れに蛇の齒を播いて置かねばならぬ。すると其の齒は鎧を着けた男となつて生えて來る。お前さんは其の男

と戦争をせねばならぬ。勝つたからとて最うそれだけで、金毛の羊の毛皮が取れるのではない。それは、金毛の羊の毛皮は松の幹よりも大きな蛇が番をして他の者を側によせないから。其の蛇の上を通らねばお前さんは金毛の羊の毛皮の所には行けないのですよ。』

此の時ジャンソンは苦々しげな笑を口許に洩して、

『あの羊の毛皮が這麼規則の亂れた國王の領地の内にあるのは不都合だ。私も此の若い年をし乍ら、野邊の露と散ることか。私は明日の太陽の昇らない内に毛皮を取つて見やう。』

といつたので、メデアアは身を震はしていふには、

『什麼豪い勇士だからとて、私に教はらないではあの羊の毛皮のところには行けない。それは河向側のあの毛皮の周圍には、非常に高い城の壁があつて、開れには高い塔や三重の鐵の門が幾個も附いて居る。そして其の門の各個には猛々しい森の魔法

使プリモといふ獵女が、雙手に火をつけた松火を持って居ると其の周圍には澤山の獵犬が猛り狂ふて居る。誰れとて此のプリモの顔をよう見る者はない。唯プリモの尼の妾ばかりは會へるのであつて、其のプリモは強い者が來はしないかと、遙か遠くまで常も見張つて居る。』

「什麼高い壁でも攀ぢられないことはない。什麼深い森でも通られないことはない。又什麼魔法使の女でも避けられないといふことはない。若し賢い處女だに私を助けてくれたら、金毛の羊の毛皮だつて容易くされる。』
 憊ういつて、ジャンンは賢い眼眸でメテアを見て、开して何時までもく見詰めて居た。

ジャンンの雙眸は爛々と輝いて來、メテアの雙頬には赤味がさして身は戰慄へて來た。

「誰れが烟火を吐く猛犬に向つて行けるものか。鎧を着けた人を萬人も相手に戰爭の

できる者ぢやない。』

ジャンンはメテアに媚び諛つていふには、

「貴女さへ助けて下さればやれます。貴女のお名は世界中の隅々まで響き渡つて居ります。西方の怪物島に在らつしやる御姉妹シルスさまより、もつとお賢くて、數ある魔法使の女々の中でも貴女は女王さまではありませぬか。』

メテアは、

「妾は痛々しい誘惑や、心をかき撈るやうな思想の來ない遙か遠くの怪物島に行つて、姉妹のシルスと共に住みたい。が、併し、貴方をば此處で無慘無慘とは殺せない。……妾は此處に不思議な油を持つて居ます。これは妾が雲漠の中に聳えた高架察山中で、プロメシユウスの創口から生きた不思議な氷の花で作つた者で、此れを貴方のお躰に塗ると貴方のお躰内には不思議な力ができて來て、七人の敵を相手にして戦ふことができ、又、その油は楯に塗れば、活火でも刀劍でも貴方のお躰に害をす

ることはできなくなりませう。が、此の薬は日中だけ効能のある者ですから、貴方は
 日の歿る前にお仕事を終まされなければなりません。それに又、貴方は蛇の齒を播く
 時に、最初に此の油を貴方のお身に塗つてお置きなさい、そして土から其の齒が生
 えて来た時に、兜を其の中に投げ込めば、それ等のものは自然と滅びて了ひます。
 憚う教へられて、ジャンンは、メデアアの脚下に跪いて、其の手に接吻して、感
 謝した。メデアアは不思議な油の入つた瓶をジャンンに與へ、軀をわななくさせて、
 兼や葭の繁つたなかに逃げこんだ。ジャンンは事の行末を一伍一什、諸勇士に物語り、
 油の入つた瓶を取り出して見せた。諸勇士は皆大變喜んだが、イタス許りはそれが嫉
 ましくて終に氣が狂つて了つた。

その曉、ジャンンは沐浴をして全身と楯や兜や武器にその油を塗り、諸勇士と共に
 魔術を試みた。諸勇士は油を塗つた槍を曲げやうとしてみたが、黒鐵の門の棒のや
 うで曲らない。イタスは劍でそれを切つて見たが、却つて、劍の刃の方が、長く割け

て、其の缺片がイタスの顔に飛び返つた。で、今度は皆で、楯に槍を投げつけて見た
 が、却つて、槍の穂尖が鉛のやうに曲りて了つた。ケーニユウスはジャンンを取つて
 投げやうとしたが、ジャンンはびくともしない。ポリリュウスは、牝牛でも殺すこと
 のできるほどの強い拳固を與れたが、ジャンンは只莞爾した許りで何ともならない。
 諸勇士は嬉しさにジャンンを取り巻いて踊躍りした。ジャンンは亦不思議に強い力を
 得たので、嬉しさに跳ねるやら驅けるやら、叫ぶやらして、自ら喜んだ。折柄太陽は
 中空高く昇つて来た。ジャンンが、アイエテス王のところに行つて、約束を果すべき
 とさとなつたのである。

ジャンンは戦争の準備のできたことを知らせるためテラモンとアイサリテスとを使
 者としてアイエテス王のところ遣はした。二人は大理石の壁、黄金葺の屋根のアイ
 エテス王の家に行つて王の居る廣間に入つた。その時、王は怒氣のために顔の色が物
 凄く青褪めて居た。

「眩しい太陽の子息さま。お約束を實行して頂きたい。私どもに蛇の齒を下され、猛犬を放して下さい。私どもの仲間のうちに一人毛皮を貰はうといふ豪い者が出来たのであります。」

一五六

憚う聞いたアイエテス王は兩唇を噛みしめて、いかにも心配さうな容子であつた。王は諸勇士は昨夜、夜にまぎれて逃げ去つたことばかり思つて居たのである。がその場合、約束を破る譯には行かぬので、二人の使者に蛇の齒を渡した。王は駟馬の車を召び、使者を市街にたてた。人民等は王と共に怖しい戦神の野に出た。

アイエテス王が玉坐に着くと、その兩側には武士が羅列れた、その數、數十萬、皆頭から脚まで、全身鐵の鎖甲子を着けて居た。人民等は窓や床机や、城壁に群り着いて居た。ミニユアイ人も共に立つて居た。が、大勢の中で見ると其の勢は一握にも足らぬほどの人數であつた。

其處には、カルシオーブも居る。アルゴスは戦々して居た。メデアは密つと面被で顔を包んで居つた。が、アイエテス王はメデアが、その雙唇の内、魔法をやつて居るとは些しも知らなかつた。

ジャンンは叫んだ。

「お約束ぢや、一つ猛犬を出して頂きたい。」

アイエテス王は臣に命じて門をあけさせた。と、不思議な犬が躍り出して、ジャンンを目かけて、頭を垂れて進んで来た。犬の黒鐵の蹄が土地に着くと音が立ち、鼻の孔からは一團の火焰が燃え立つた。が、ジャンンは畏怖れることなく、一脚も退かない。鼻から出る煙はジャンンの身を取り巻いたが、ジャンンの軀は頭髮一筋焦げない。メデアが魔法を初むると、その犬は突然に動かなくなり、軀を戦々させて居た。此の時、ジャンンは直ぐ側から犬の背中に飛び上つて、角を擱んで、或は上になり、或は下になりして相撲つた。到頭、犬は膝を折つて倒れて了つた。流石に猛々しい犬

一五七

もメデイアが双唇の間に呪文を誦さく、確乎と睨んだので力なくなり、四肢が利かなくなつて了つたのである。

猛犬は容易く捕獲にすることができた。ジャンソンは犬を鋤に結び付け、槍を軀に刺し貫き、かくして終に無事に戦神の森も耕し了つた。

ミニユアイ人は喜んで叫んだ。が、アイエテス王は大變怒つて固く双唇を噛み咬めて了ふ。これでジャンソンの仕事は半分終つたのである。が、太陽はまだ空に高い。

それから、ジャンソンは、蛇の齒をその畝に播いて、起り来るべき結果を待つて居た。メデイアは自分の教へたことを忘れはしないかと心配して、ジャンソンと其の兜を見守つて居た。

ど、聽て塊は、一廳一廳啼ぐやうな響を立て、膨れ初め、泡の立つやうに持ち上つて来て、その土の一塊一塊から一人の男が表はれて来た。その數凡そ數千、皆全身に鋼鐵の鎧を纏ひ、室を拂つた劔を持つて、真中に立ちはだかつた。ジャンソンは衝き進

んで来た。

此の時ミニユアイの諸勇士はジャンソンの身を氣遣つて、顔は青褪めて了つて居たが、アイエテス王は双唇に忌々しげな冷笑を浮べて居た。

『見る、見る、俺は兵が足りなくなれば、此の通り何時でも土から招び出せる』。

といつたが、ジャンソンは、兜を脱いで、群集がる兵の中に投げ込んだ。と、その兵士どもは、前後も辨へぬ荒い心になり、皆で、邪推をする、惡み合ふ、恐れるといふ振になつて了ひ、一人は、

『貴さまは俺を打つたな』。

ど、いふと、他の一人は、

『貴さまはジャンソンとな。殺して了ふぞ』。

といふ者もある。這麼にして地から出た兵は心が荒ましくなり、各自に争つて居たが、終に、同志撃のため、悉く地に仆れて了つた。そして、上に持ちあがつた塊は

此の時、平らになり、縁細かな百草がその後には繁くなつて来た。これでジャンンの仕事は全然終つたのである。

一六〇

此の時、ミニユアイ人は悉く立つて歎び叫んだ。

「太陽のある内に、今直ぐから、金毛の羊の毛皮の處に案内して貰はう」と、叫んだ。が。

「ジャンンは猛犬を征服し、恐ろしい蛇の齒を種播いて、それを自分で刈り取つて了つた。總ての魔法も悉くあの男には効能がない。這麼男は初めてだ。是れでは、ジャンンはあの恐ろしい蛇まで殺して了ふかも知れぬ。」

「懲う考へて、アイエテス王は、心ためらつて来て、その子と相談を初めた。其内、終に太陽は西の空に沈んで了ひ、四邊は暗くなつて来た。此の時アイエテス王は使者を立て、布令させていふには、

「諸勇士の面々、今夜は休んで、明日改めて金毛の羊の毛皮はお渡しませう。」

それから、アイエテス王はメデアアを振り向いて、

「是れはお前の仕事だよ。たわけた馬鹿娘、お前があの頭髪の黄いろい外國人を助けて、父さんの身に耻辱を與へたのだ。」

と懲ういつた。メデアアは怖くて縮み上り、身を戦々させ、顔色は青褪めて了つた。で、いよくメデアアがした仕事であることが明らかになつたので、アイエテス王は、

「若しあの奴等が金毛の羊の毛皮を取ることの出来た曉には、お前は生命はないものとする思へ。」

といつた。ミニユアイ人は餌食に欺かれた狂獅子のごとく、咆を哮りつゝ船に歸つた。ミニユアイ人は、アイエテス王が自分等を欺いているくゝな骨折をさせて、馬鹿なめを見せてやろうとして居る計畫を悟つた。かくて、オルフォイスがいふには、
「我等は一緒に森に行つて力づくで取つて来やう。」

ど、氣疾いイタスは、

「それなら、抽籤で先さに行く者を定めやう。そして、一番先さに行つた者を蛇が呑んで居る間に、次の者がその毛皮を奪ひ取ればいゝ。」

といった。が、ジャンンは二人の計略を褒めたけれど、開れを實行はしなかつた。ジャンンはメデアアの助けを期待して居るのである。

聽て、メデアアは身を戦々慄はせながら、やつて來たが、長い間、黙つて居て、物も云はず、泣いて居た。が、終に、

「妾は最う此の世には生きては居られませぬ。父は妾が貴方をお助け申したことに感付いて、妾を殺すといつて居ます。父は貴方も殺したいでせうが、お客さまのことですから、それは致しますまい。で、早くお國に歸つて下さい。開して假令、海を渡つて遠い國に行つても可哀なメデアアのごことは忘れないで居て下さい。」
といったが、諸勇士は聲を揃へて叫んだ。

「貴女が殺されるなら私ども、深く死にます。貴女が居て下さらねば、あの羊の毛皮は取れず、開けなければ、吾等は故郷には歸られませぬ。では、どうせ、此處で一人も残らなく死んで了ふまで戦争する外はありませぬ。」

ジャンンは、亦、

「いや、貴女はお死になる必要はありません。此の國を去つて吾等と一緒に海を渡つて来て下さればいゝ。で、どうか、あの金毛の羊の毛皮はどうして取るのか教へて下さい。貴女は開れを御存じでせう。開して、亦、貴女は何故、森の犬の尾などになつて居らつしやるのです。私に何うかあの金毛の羊の毛皮を取る方法を教へて下さい。そして、貴女は吾等と一緒にミニユアイの國に來て下さつて、澤山の殿様の支配をする王さまの王妃となつて下さい。」

諸勇士はメデアアの周圍に詰め寄つて、皆で、必ずメデアアを王妃として尊ぶといふことを誓つた。

メデアは泣き悲み、身を震はせて、双手もて、その面を覆ふた。それはかれの姉妹のこと、朋輩のこと、又は、生れて育つたその家のことが戀しく懐かしくて、心悲しくなつて來たのであつた。が、終に顔をあげて、ジャンンを見て、嘔り泣きの聲も絶えぐに、

『妾は生家も朋輩も捨て、外國にまで行かねばならないのでせうか。これとて、前世からの約束ごとなら詮術がない。では、あの羊の毛皮を取る方法は教へて上げませう。船を森の側に着けて確乎と岸に繋いで置きなさい。そして真夜半頃、ジャンンが勇士一人連れて上陸して來れば妾は壁下で待つて居ます』。

『私がお伴は致します』。

『いや私が』。

『私も』。

と、争ひ初めた。性急のイタスは、かねて何事にも人の先驅がして見たい性質であるので、その心に任せぬ焦燥しさに氣が狂つた。が、メデアは總ての人々を静沈めていふには、

『オルフオイスが魔の豎琴を持つてジャンンに隨いて來るがよからう。妾はオルフオイスは樂手の王で、此の地上の者なら何者でも、歌聲で魔術にかけて了ふことができると聞いて居るから』。

ジャンンは歡び極まつて笑ひ、手を拍つて喜んだ。昔時は歌人とか音楽家とかいふ人は什麼勇ましい武士にも劣らないほど大膽な人々であつたのである。

メデアのいつた通り、夜半頃、ジャンンはオルフオイスを率ゐて上陸した。メデアは弟のアブシルタスと一緒に一年生の小羊を一匹づゝ連れて待つて居た。メデアは戰神の森につれて行つた。其處で、ジャンンに一條の溝を掘らせ、羊を殺して、その中に入れ、上には魔法のため草や蜂蜜を散いた。

此の時、魔法使プリモスは突然に地から起き上がり、赤い火を持ってメディアの前に振り翳した。獵犬はくるくると輪を回して駆け廻つた。プリモスの三個の頭の、一つは、馬のやう、他の一個は獵犬に似て、他の一個は蠅の頭のやうで、雙の手には、各一口づゝの刀を持つて居る。プリモスは獵犬と一緒に溝の中に躍り込んで、腹一杯、飲み且つ食ふた。此の光景を見て居たジャンソンとオルフォイスとは、戦々して居たが、メディアがその双眼を覆ふと、何時しかプリモスは姿を消して獵犬と共に森の中に駆け込んだ。そして、諸門の門は脱れ、鐵門の扉は兩方へ開いた。メディアと二勇士とは急いで、其處を駆け抜けて、鬱然とした大檜の森の中を駆け通つて、終に金毛の羊の羊皮の釘着けにされて居る一本の大檜の前に出た。ジャンソンは跳りかゝつてそれを取らうとした。が、メディアは引きとめて、身を戦々させながら、その檜の根許をさし示した。見ると、什麼にも、大きな蛇の軀は大松の幹かと思はれるばかりの根許にうねうねと捲圈を巻いて居るのであつた。それが幾尋の廣さにもわたつて居つて、

青銅や黄金の色にきら／＼輝いて居る。人々はその半身だけは見たが、残りの半身は、見ることができなかつた。それは残り半分は遙か向ふの間の裡に横はつて居たからである。

ジャンソン等が来たので、蛇は頭を擡げて、その爛々する双眼で人々を睜めて居た。口からは三又の舌を吐き、哮り狂ふ聲は森を動かすほどであつた。

が、メディアがやさしい聲で呼ぶと、蛇は長い斑のある頸をあげてメディアの手を嘗め、食物をはたるやうに仰視けた。その時メディアがオルフォイスに目配するとオルフォイスは不思議な歌を歌ひ初めた。

その歌が終ると森は沈り返つて、木の葉一枝さへ動かない。蛇は頭を垂れて黒鐵の捲圈を解き、爛々光る眼は物憂はしげに閉ぢて了ひ、終に呼吸さへ小供の様に和らかになつた。此の時オルフォイスは人や、獸や波を静めるために愉快な眠りの神を呼び出した。

此の時ジャンンは、前後に心を配つて、前に躍り出て、蛇を躍ね越して、樹幹から金毛の羊の毛皮を割き取り、ジャンン等四人はアルゴ一丸の繋いである岸邊に出た。

ジャンンが金毛の羊の毛皮を高く指しあげた時には、暫時は誰一人一ことの聲を出す者もなく寂として沈静り返つて居たが、麩て、ジャンンは此の沈静を破つて、

『いざ進め、アルゴ一丸、疾く進め、若し今一たびペリオン山が見たくば』

諸勇士は一聲も洩らさない。唯船やる櫂の音のみ物凄く、人々は腕の折れんばかりに漕いだ。アルゴ一丸は音高く水を切つて進んだ。

露繁き闇を分けて、諸勇士は東の間に急流を下つた。黒い城壁、諸寺院、東方諸國の城壁の下を通つて、更に水門口や異香馥郁たる花園や、珍らしい菓實の實つた森をぬけ、肥牛の眠りを貪る沼澤地、風に謔く蒹葭の繁つた長い河床を過ぎて、終に沙灘に出た。此處では小波から立つ楽しい水音が、恰かも、月白き夜に、獨り友もなくころ／＼水の轉げて居るかと思はれた。

諸勇士は狂ひ立つ高濤を凌いで漕ぎ、アルゴ一丸は馬のやう波を躍り越すのであつた。

船が渺茫した海に躍り出た時には、流石の諸勇士も最う綿のやうに疲れ切つて居て息使ひさへ喘ぎ／＼各自の櫂によりかゝつたまゝ動けなかつた。

此の時、オルフォイスは堅琴を取りあげて、一曲、凱歌を奏した。諸勇士は再び元氣付いて、西の世界をさして漕ぎ初めた。

(その五) 海上の妖術

諸勇士は大急ぎに急いで西をさして逃げた。が、アイエテス王は艦隊を揃へて追ひかけて来た。眼光の鋭いリンシユウスは疾くも數里を隔て、居るのに、アイエテス王の迫手の艦体を見附けて叫んだ。

『東の方、遙か遠くに百隻の艦が群れた白鳥のやうに見えて居る』

これを聞いて諸勇士は力一杯に漕いだ。が、アイエテス王の艦隊は一時間一時間と愈近づいて来るばかりであつた。

此の時、メデアは残酷な計謀を立て、弟のアプシルタスを殺して海に投げ込んでさていふには、

『父が弟の死骸を引きあげて葬るには、随分長い時間此處に艦を停めて居なければならぬ』。

此れを見ると、諸勇士は身ふるびして、其の行爲の恥づべきに互に顔を見交して居た。が、皆メデアの教へによつて、金毛の羊の毛皮は取ることができたのであるから罰は加へなかつた。

アイエテス王はその處に来て見ると、子息のアプシルタスの死骸が浮きつ沈みつして居る。で、暫時、船を停めて泣く泣くその死骸を引き揚げて家に連れ歸つた。が、水夫等をば西方に使はして、

『私に代つてメデアを捕へて来てくれ。彼女は儂い死に目に逢はせてやらなければ承知が出来ない。若し彼女を連れて歸つて来ることができなければ、汝等を酷い殺し方にしてやる』。

といつた。

アルゴナウツは其の間隙に逃げたが、チユウスの神は空からメデアの賤しい罪業を見て、暴風を起し、船の行く手を逸らして遙か遠くの方に吹き掃つた。一日又一日、暴風雨はアルゴナウツの船を驅つて、泡沫たぎる中、深い霧の中に吹きやる。太陽は薄汚ない光を放つて居るので、終に諸勇士は自分で自分の何處に來たのか分らなくなつた。が、到頭、船は泥の洲にうち上がった。波浪は船を打ち越して來て、諸勇士は最う生きる希望さへなくなつた。

此の時、ジャソンはヒーラの神に叫んでいふには、

『今日まで無事に守つて居て下さつた女神さまよ。吾等は這度何處とも知らぬ海の本

層とならねばならぬのでせうか。吾等が困難危険を忍んで得た名譽も失つて了ひ、再び希臘の景色のいゝバカサイの海を見ることはできないのでせうか。』

此の時アルゴの船に立てゝある枝はいふた。

『畢竟、此れはテュウスの神の怒りを買つてからなつたのである。開れば、此の船の甲板で残酷な罪を犯して神聖な船を汚したからである。』

と諸勇士の中には、恚う叫ぶ者があつた。

『其の犯罪者はメデアだ。あの魔女は罪を負はして殺して了へ。』

で、皆メデアを捕へて海に衝き落しアシルタスを殺した罪の償としやうとしたが、船の樅の樹は復たいふた。

『その魔女は諸々の罪の充つる迄では生かして置いた方がよい。今、直ぐといふではないが、何時かは屹度あの女は復讐を受ける時が来る。が、諸勇士はその女の用なくなるまで殺してはいけない。諸君は、此の女に西方の島嶼に住んで居る姉妹シ

ルスの處に行く道をさかなければいけぬ。諸君は此のシルスの處には困難な海路を経て行かなければならぬ。其處でシルスは諸君の罪を浄めてくれる。』

此の時、諸勇士は皆、此の樅の樹の告げを聞いて聲をあげて泣いた。これは諸勇士は皆、まだ、前途に暗い旅路とうい辛い幾星霜を経なければならぬと思つたからである。で、ある者は不思議な魔女メデアの罪を責め罵り、或る者は又、

『否、吾等は大層メデアの恩を受けて居る。彼女が居なかつたら、吾等は金毛の羊の毛皮を得ることはできなかつたであらう。』

といふ者もあつた。が、大抵は皆、黙つた切り、雙唇をかみ切めて居た。是れはメデアが魔法を使はなければよいがと、恐がつて居たからである。

聽てすると、海は次第に静かになつて来て、太陽は再びもとの光を放ち初めた。で諸勇士は船を沙岸から卸して不思議な魔女の命令に従つて、まだ見も知らぬ海の波を分けて長い苦しい船路を辿つた。

諸勇士は何處をどう通つてシルスの島に着いたかは分らなかつた。ある人の説では、諸勇士は西の方ダニウツ河を溯り、船を曳いて白雪の降り積んだアルプス山脈を越えアドリアチック海に出たといふ。又、或る人の説では、諸勇士は南の方紅印度海に出で、香料薬味の繁茂せる太陽地帯を過ぎエチオピアに廻り、尙ほ西に進んでリビアに出で、船を曳いて燃ゆるやうな熱沙の中をぬけ、丘岳を越え肥沃なシレヨとロトスイ、の海岸の間平原流砂の幾哩もなく續いた廣いシルテスの地に入つたといふことである。總て此等は正しい證據のある説ではなく、只人の知らない土地を臆らくと指し示したにすぎないのである。

が、諸勇士は凡そ九日間、繩や轉器で、船を曳いて陸地を行き、終に又、何處とも知らぬ海に出たとは人の皆いふ處である。古の名高い歌を見ると、皆それにも、彼等が北に行き海岸のカウカサス山脈の麓に出て、タイタンが猛犬の背に跨がつて居る狹いシメリア、ポホフォラスに来て、水淀んで閑寂なメトット湖に入り、更に北をさし

て今日のドン、當時のダテース山に登りコロニア、サウロマタイを経、水草追ふいろいろの牧羊人種を尋ね、獨眼のアリマピスの所に來た。アリマピスといふは希臘の諸詩人が寒いフレフェア山中のクリフキンで黄金を盗んだと歌つてある者である。

其處から、諸勇士はシチアの穹窿門を過ぎ人を喰ふといふ極星タウリの下で牧畜業を營めるピペルプロテを問ひ、終に北の大海、波動かす水死せるが若きクロニアの海に出た。此處で、アルゴ一丸は少しも動かなくなつて了つた。

で、諸勇士は皆、手を拱いて頭を垂れ、疲勞れて餓渴て唯死を待つより外はないのであつた。が、剛勇な舵手アンケーオスは更に諸勇士の心を鼓舞して上陸させ、繩や轉器で船を曳き行くこと數日、昔時の歌を見ると其處から諸勇士は長壽者の多い生計豊かな國民の處に出で、雪に封せられた山々の間の谿に埋つて太陽を見ることのないといふシメリアの海岸に行き正義な國民の住む國ヘルミオンといふ沃地に移り、下界の門に下り、夢の國に入つたといふことである。

此處に着くとアンケーオスは聲をあげて、

「暫時我慢して居王へ。勇敢なる諸君よ。一番困難な所は通つて了つた。聞くも疑もない、西風につれて大海の波々ゆる響が聞えて来た。で、橋を立て、帆をあげて、此方に何か人間らしい者が来る。あれに會つて見やう。」

此の時、樅の木は又語つた。

「あゝ私はもつと早く、あの青い岩に打たれてユウキシースの海の底に沈んで居ればよかつた。諸君の罪の汚れのために、何處を端なく漂ひ廻るよりも、其の方が遙かによかつた。アプシルタスの血液は、尙追つかけて来て不幸ついき、今に亦、アイエル子島附近に行くとき暗い運命が私を掴へるだらう。諸君は陸地に確乎とより沿ふて南方へ南方へと、何時までも行かないと又涯岸も知らぬ大洋に漂ひ出るだらう。この言葉をきいて、諸勇士は帆をあげ陸地に沿ふて船をやつた。が、船のまだ雲霧深く罩めて、暴風雨の狂ふアイエル子島に着かない内に、颶風が起つて、四顧闇く、

波は怒り狂ひて帆を捕へ繩を引くのであつた。かくて十二晝夜といふ長い間、渺茫として果なき荒波怒る西の海へと泡沫、淀水、はた巨浪の間を分けて、太陽の光りも星のさらめさも見る事ができず驕り立てられた。

で、諸勇士は又叫んでいふには、

「我等の生命は最うない者だ。吾等は一体今何處を漂ふて居るのだらう。暗い闇の裡に落ちて了つて何方が北だか西だか全く分らない。」

が、眼光の鋭いリンニユウスは快活な聲で、船頭から叫んでいふには、

「勇ましい諸君よ。勇氣を出しなさい。此處から松の樹の茂つた島と、周圍に一杯雲のかゝつて居る親切な地母の室とが見えて来た。」

が、オルフォイスは、

「あの島に行つても駄目だ。彼處には人間は上陸させない。海岸には一つの港もなく只周圍は高い斷崖ばかりだ。」

といったので、アンケーオスは船路を變へて、更に進むこと三日、終に亞細亞の地に入りシルスの住んで居る島に着いた。

此處でジャンンは、諸勇士を上陸させ、島の中に人や居ると捜させた。内地へ深入り込むとき船へ來やうとして居るシルスに會つた。見ると、シルスの姿は頭髮も顔面も上衣も燃え盛る焔火のやうに光つて居つた。

シルスがメデイアの方へ進んで來るとメデイアは面被で顔をかくして居た。此の時シルスは叫んでいふには、

『あゝ、お前は情ないことをしてくれたね。お前は四の時、花さき亂れた此の島に來るとは、最うお前は自分で犯した罪はお忘れなだらう。何處に年を老つたお父さんはお出でなの。お前の殺した弟は何處だえ。お前の愛して居る此等の外國人は到底一緒に先きまで無事には行かれないよ。妾は食物と酒とは上げるから、船を此の島には着けておくれでない。汚れた船に乗つては人々まで汚れて居る』。

之れをきいた諸勇士はシルスに向つて、

『我等の罪の汚れを淨めて下さい』。

と叫んだが、それは駄目であつた。シルスは諸勇士を送り出していふには、

『マレアといふ土地に行くこと其處でお前等の汚れは淨くなる。それから國にはお歸りなさい』。

此の時微風が吹き起つた。諸勇士はターデツサスに沿ひ、イペリアの海岸を馳せ、遂に大西洋に出た。其處から尙、進んでサルデニアの海岸の諸岬をすぎ、終に穏やかな晴れた夏の夕べ、百花千花亂れ咲いた小島に着いた。諸勇士が疲れ切つた軀を以て徐々、その島に近づいて來ると、陸ではよい聲で歌を歌つて居る者がある。メデイアは開れをきくと驚いて、

『諸勇士等よ。注意しなければいけません。此處がザイレンの島です。船は此の島に沿ふて行かないと外には船路はないのです。が、あの歌聲に聞き惚れては生命があ

りませぬ』

此の時樂人の王オルフオイスは、

『私が一つあの島の歌人と歌ひ競べて見やう。私はあの非情な木石や龍宮城までも魔力にかけて了つた。それを有情の人間が！』

といつて、堅琴を取りあげ、船の尾に立ち不思議な歌を初めた。

諸勇士は百花千葉咲き揃ふて美しい小島アンセルマウサで、ザイレン人を見た。没日を浴びて紅に染つた岩の下、石竹色の罌粟や黄金色の百合の花が生えて居て、其處には二人の美しい處女が坐つて居つた。ザイレン人は徐ろに歌ひ初めるのであつたが、其の調子は睡りを誘ふやうで、あだやかな、そして明瞭した白銀を鳴らしたやうな聲で、黄金の波の揺ぐ海の面を忍んで来て、オルフオイスが歌つて居るにもかゝらず、それが、諸勇士の心の奥に泌みく泌み徹るのであつた。此の歌を聞いた者は何者といへども島の周圍に足を留めて聞き惚れない者はない。海鷗は巖に沿ふて列び

海豹は濱邊の日あたりのよい處に寝て、生怠るい頭を傾けてき、白銀色をした、群魚はその聲をさくために集まつて来る。そして、その群魚が散々に分れると、燦然とした光が立ち水音が起るのであつた。頭の上を蓬然と鳴つて、西へと雲を追ふて走る風も静まり、雲は中青色になつて、金毛の羊の群れたやう。物皆悉く夢の心地で聞き惚れて居た。

諸勇士もその聲にきき惚れて居ると、櫂は自づと手から取り落し、頭は胸の邊まで垂れ下る。重い眼は閉ぢて来て、美しい静かな花園の景色や、梢謔やく松の樹影の眠りを夢み、終に、労働や勤勉がいやになり、再び名譽のことも考へなくなつて来た。

此の時、勇士等の中の一人は俄然に頭をあげて叫んで、

『何時までもく漂ひ行つて何の面白いことがある。此處に留まつて暫時休息んで行かう』

といひ出した。又一人は、

「船を岸に着けてあの歌を聴かうではないか」
又他の一人、

「私はあの歌の意味は何か分らないが、音楽はききたい。あれを聞いて居ると心持のいゝ融けるやうな眠氣が催して来る」。

といふのであつた。がバレンチオンの子息の奇麗なブーテスは終に海に入つて叫び叫び岸へ遊び初めた。

「不思議な處女等よ。私は来た。私は来たのです。貴女方の聲歌のきつたさに。此の島で骨と朽ちたさに」。

といつた。此の時メデアは手を拍つて叫ぶには、

「オルフォイスよ。もつと少し聲をはりあげて歌ひなさい。思ひ切つて調子を高くして歌ひなさい。此等の不幸な怠惰者の眠りを呼び醒さなければ、此の先き希臘人の手並を知る者はなくなる」。

オルフォイスは更に豎琴を取りあげて、巧妙な手で弦を撥いて掻き鳴らした。樂の音と肉聲とは静かな夕べの空を動かして、雷霆のやう、岩も鳴り海も騒ぐのであつた。この歌と樂とが諸勇士の精靈に醇酒のやうに浸み徹つて、心臓の鼓動は激しくなつて来た。

オルフォイスは亦、バアセアスの歌を歌ひ、バアセアスが神に従ふて海や陸を跋渉たこと、バアセアスが恐ろしいゴルゴンを殺して、奇麗な花嫁を得たこと、又バアセアスがオリンプスの山の上で神々と共にゐて、み空の星の一つとなり、美しい花嫁も一緒に居ること、そしてバアセアスは此の世の人に尊まはれて居るといふことを歌つた。

オルフォイスが這麼歌を歌ふと、ザイレンは亦歌ふて海に向ふから答へた。が終にオルフォイスの聲は、ザイレンの聲に勝つて、その聲を打ち消して了つた。で諸勇士は再び織を取りあげたのである。

怒うして諸勇士は又叫んだ。

『我等はバアセアスのやうな人間になり最後まで勇ましく忍耐しやう。我等はザイレ
ンの魔の歌を忘れるために最う一度バアセアスの歌がききたい』

オルフォイスは再び歌つてきかせた。その歌が終ると、諸勇士は櫂を取つて船を沖
に漕ぎ出した。諸勇士を勵ます樂の音は斷續に聞えたが、ザイレンの歌声は諸勇士の
漕ぐ船から起る水音でかき消されて了つた。

が、ブーテスだけは海岸に遊ぎ着けてザイレンの脚下に跪いて叫ぶには、
『何うか何時までも歌つて聞かせて下さい』

最うこれより外の言葉は出すことができなかった。ブーテスは氣持のいゝ眠氣がさ
して来て耳には愉快な嘯きの聲が聞えるのであつた。聽て人の骨の散らばつた濱邊の
小石の間に仆れてすつくり眠入つて了つた。

此の時三人の化生のザイレンの處女は兩唇に物凄く笑みを傾けて、徐ろに立ち上り、

ブーテスの側に寄つて來た。見ると其の手には鴛鳥のやうな爪がある。

綺麗なアフロヂットはイタリアンの絶頂からこの光景を見て居た。が、ブーテスは
年若い綺麗な男である。それを殺すのが可哀さうになつて來た。で、アフロヂットは
その黄金の玉坐から下りて、流るゝ星のやう、蒼空を裂いて、煌々する尾を曳いて、
終にザイレン島に下りた。今しも三人のサイレンの處女が、前足をかけてブーテスを
餌食にして了はうとして居る處を引き起して、熟睡して居るブーテスを抱きあげ、黄
金色の霧に包み、リービユウムの嶺に連れ上り、其處で一緒に楽しい幾星霜を暮した
のである。

ザイレンの處女姉妹は自分等の敗けて餌を奪はれたことの口惜しさに濱から海に身
を投げた。其の軀は遂に岩となつて了つた。

諸勇士は此處から、リービウム海峡まで來て、三角形のシ、リー島に出た。此の島
の下では、巨人エンセラチユスが、晝夜呻吟きながら寢て居る。其の人が寢返りを

打つと地震が起り、その吐く呼吸は胡桃の森林の上に高く聳えたエトナ火山の頂から吹く燐のやうに燃え上つた。

又、其處ではキャリブスが諸勇士の船を捲き立つ波の中にさらへて、帆柱までも水に漬かつて了つたので、進みもならず、退きもできなかつた。と、旋渦が起つて船を捲き込んで了つた。

恚うして水に弄ばれて居た諸勇士は此の時、程遠からぬ海峡の一方に當つて頂の白雲に包まれた岩が立つて居るのを見たのである。此の岩は磨きあげたやうに滑らかで、手や足を二十本も持つて居ても攀ぢ登れない位、その西面の中腹に當つて霧罩めた洞穴が一個あつた。

オルフォイスは此の洞穴を見て、呻吟き聲を出して、確乎と手を拍つていつた。

「旋渦の顛を逃れるためには、あの岩は殆んど何の役もしない。あの洞穴には若い小犬の聲の出来るスシラといふ海婆が住んで居る。私の母は私が希臘を出立する前

に、此のスシラの事を警しめてくれた。あの海婆には六個の頭と六個の長い頸があつて、あの暗い洞穴の中に隠れて居る。开して其處を通る者は魚でも海獣でも何でも構はず捕へるので、什麼強い船乗りでも其處を無事に通つた者はない。スシラがその長い頸を動かして六個の口で一人宛捕へる。今、吾等を助ける者は何んであらうか。チユウスの神もヒーラの神も我等を惡み玉ひ、船は罪障に汚れて居る。最う我等は死ぬより外に道はないのであるか』

此の時、海の底から白銀の脚あるペリウスの花嫁デナスが夫を慕ふて表はれて來た。デナスには、海の女神がついて居て、白い海豚のやうに船の周圍を躍り廻つた。そして女神等は先案内に立つて船をば處女子の鞠を轉ばすやう、大濤の中に衝き出して行つた。スシラは船を掴まうとして、身を前の方にかゝめた時、女神はスシラの貪り深い頭を撃つた。女神等のやはらかな手が觸れると憎きスシラは小犬のやうな聲で鳴いた。併しスシラは吃驚して洞穴の裡に身をば引き込めて了つた。アルゴ一丸は安全に

スシラの側を通ることができた。加之に、後からは和かい風が吹き起つてきた。此の時デナスと女神等とは、海の底なる珊瑚島に歸つて了つた。

彼等の住む花園には緑、紫、色とりどりの花が、四つの時絶えず咲きこぼれて居るといふ。恙うして無事に通りぬけたことを嬉しく思ひつゝも諸勇士は尙ほ此の先き什麼事が起つて来るかと、心配しいし進んだ。

その後、船を漕ぎ進むこと幾日か、味気なき日を送つて行くと、到頭島と島とが相對ひ合つて居るのが見えて來た。で、諸勇士は其の島に港を捜して船を漕ぎ入れた。見ると其の島には大きな町があり、教會も城壁も庭園もある。又斷崖の上には中空高く聳へた城もあつた。そして、何方を見ても、島には口の狭い、内の廣い港があり、岸には櫓の高い黒船を幾隻となく繋いであつた。諸勇士は見て不思議に思つた。此の時、伶俐な舵手アンケーオスは、

『これは又新たに不思議なことが起つて來た。島々港々又は何處の端の津々浦々吾等

の知らない所とてない。此の島は氣の荒い少數の牧人のコルシラが住んで居る所に違ひない。仕うして此等の新しい港や奇麗な石造の建築はできたのだらうか』とジャンンはいつた。

『此處には野蠻人なぞ一人も居ないに違ひない。我々は港の中に入つて見て來やうではないか』

諸勇士は石で築きあげた大阜頭として、アルゴ一丸に比べると余程大きな黒船の千隻も集まつた間を通りぬけて船を港に漕ぎ入れた。諸勇士は塗真鍮の屋根や、上に尖木柵の着いた長い高い大理石の壁を見て驚いた。阜頭には人が集つて、澤山な船に貨物を積み載せ、諸方に行く商人航海者、奴隸等が居る。で諸勇士は吃驚して相互に顔を見合せていふには、

『吾等がアイオクルスから海路を渡つた時には自分で自分等が世界一番の船乗者だと思つて居た。が此の町に來て見ると我等は蜜蜂の巢の前に置いた螻蛄くらいにしか

見えぬ。

此の時、卓頭の水夫等は荒げない聲で、諸勇士に對して叫ぶには、

「お前等は何者か。此處では、外國人や海賊には用はない。我等は我等だけで商賈をして行く。」

が、ジャンンは大變に諛辭を使つて、町のさま、港のやうすの立派なこと、船の大ききことなど褒めそやして、さてやさしくいふには、

「屹度、貴君はボサイドンの子息さんで、海を主宰つておいでになる方だせう。我等は航海者で、餓渴と勞働とで疲れ切つて居る者です。何うか我等に食料と飲料とを與へて下さい。さすれば平和な航海が出来ます。」

之れを聞いて、水夫等は笑つていふには、

「旅人方よ。諸君は皆正直な人ばかりのやうに御見受け申す。諸君も我等を正直な者と思つておいでせう。我等はボサイドンの子息で、海の支配をして居る者です。」

まあ諸君は皆上陸してお出でなさい。及ぶ限りの救助はして上げます。」

で、諸勇士は、全然、驅は捧のやうに疲れ切つて、鬚髭は長く延びて蓬々として居る。大陽に焼けて黒い頬、風雨に汚れて破れた衣、潮に錆びた武器、足は疲れて跛足を曳いた。水夫等は言葉こそ荒げなけれ、心は正直な親切な者ばかりで、中の一人は、

「此奴等は船乗だよ。終日船量をして來たらしい。」

他の者は、

「御覽よ、あの脛を、滅茶苦茶に漕ぎ廻つたと見えて屈つて了つて居る。歩くと野鴨のやうにふわ〜動くわ。」

此れを聞いた氣の疾いイタスは、水夫等を撃たうとした。が、ジャンンは開れを留めた。其の時、商人の一人、背の高い作りの巖丈な男が諸勇士に言葉をかけていふには、

「まあ〜、そのお腹立は御尤だが、旅人方よ。水夫等の贅言は失禮しました。が私

が親切にお話しませう。外國人でも、貧乏人でも、皆、神さまの子息には違ひないから。お見掛け申す所、諸勇士は筋力といひ武器といひ、普通の船乗とは思はれない。私と一緒に富有のアルシナス王の御殿においでなさい。眞實、心から諸君のお饗應はしませう。その上で、皆さんのお名前は聞かせて下さる。』

が、メデアだけは逡巡した。そして身を慄はせながら、ジャンソンの耳に密つと囁いていふには、

『我等は欺かれて居るのです。今随いて行くのは滅びに行くも同じです。あの人群中には妾の故郷の者で、黒い眼をしたコルチア人が故郷振りの鋼鐵の鎖甲子を着けてゐるやうです。』

が、ジャンソンは、
『最う引き返すのは遅い。』

といつて海の王に向つていふには、

『王さまよ。此の國は何といふ國でせう。此の新しい町は何處ですか。』

『此の國は神さまの大事にかけて下さるフェーセスの國だ。此の國には神さまが來て此の廣間で、我等と交友のやうにして一緒に酒宴を催しては樂むのです。我等は不法なシクロプスを逃れて、ソバアニアから此の國に來た者です。彼處では我等のやうな正直な商人が、汗を流して儲けた財貨を掠め取られるから、開れてポサイドンの子息、ノーチサスは我等を此の國に連れて來て平和な終焉を遂げた。で、今では、其の子息のアルシナスが支配をして居る。王妃はアレテといつて、大變に賢い方だ。』

で、諸勇士はその町を通うつて行く先きへ進むに従つて益々驚くことばかりである。阜頭に沿ふて行けば、海の支配者ポサイドン王の壯麗な御殿があつて、それには順序正しく大錨や帆桁や帆柱やが並び立つて居た。又街區の周圍には、螻蟻のやうに深山な造船師が繩を紡つたり木を切つたり長い帆桁や櫂を磨いたりして仕事をして居